法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

近代オリンピックでのアマチュアリズムとプロ行為

MARUYAMA, Kichigoroh / 丸山, 吉五郎

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
293
(終了ページ / End Page)
340
(発行年 / Year)
2004-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003180

近代オリンピックでのアマチュアリズムとプロ行為

丸　山　吉五郎

古代、ローマのコロッセオで行われた格闘技（DeadSportsと呼んだ人があるように猛獣との戦い人間同志の殺戮）の残忍さは見るに耐えず遂に終末を迎え、以後スポーツはキリスト教の世界の中で長い眠りに落ちた。それはルネッサンスを迎えるまで約1000年を越えた年月であり、エリスのオリンピアで始められたオリンピック（BC・776－394）がローマによって破壊されるまでの年月ほどに長いものであった。

英国ではじまった産業革命とともに働く人々に余裕が生まれはじめ、生活の中に一抹の心のゆとりと共に身体を動かすことが芽生えはじめ、スポーツは貴族のものから一般大衆のものとなった。続いてスポーツを生活の糧とするプロの競技者が現れ、それを手本にし、それを追いかけて一般大衆のスポーツも進歩を見せはじめた。

折も折、ピエール・ド・クーベルタン（フランス）は世界の青年のために、高い理想をかかげ、オリンピックの復活を提唱、世の賛同を得て20世紀を待たず、1896年第一回アテネ大会開催にふみ切った。その神髄とするところはアマチュアスポーツであった。だがその道は未だ遠かった。オリンピックがスタートしてたったの16年、第5回ストックホルムの大会で、最初のアマ・プロ　問題に直面してしまった。しかしこの問題は古くギリシアのオリンピックでも回を重ねるにつれて褒賞が与えられ都市間のオリンピックに対する対応が激しさを増し遂には選手の獲得合戦にまで及んだ例さえある。日本が戦後（第二次世界大戦）国民体育大会を開催するや、都道府県の間で選手の獲得合戦が始まったり、いまやオリンピック・世界選手権のために、産油国がアフリカ勢を自国に移民させる等、古代に行われた諸々の悪例は、古代では世紀単位ではじまったものが、近代のオリンピックが始まって一世紀のあいだに諸悪が噴出しているありさまである。どう

してこのような状況が生まれたのか、スポーツと言っても余暇のレジャー的なものから始まった20世紀のスポーツも、戦後のスポーツは、大戦による国土、民族の疲弊（砲弾、爆弾による破壊、戦闘による兵士、非戦闘員の殺戮）から得たものは、身体を鍛えておかなければならないということだった。

更に戦後ソビエトの勢力拡大により、ヨーロッパは東西二つのブロックに分かれてしまった。社会主義は自分の主義主張が最高のものであらねばならない。スポーツにおいても勿りであった。その勢力は1956年メルボルン・オリンピックからのソビエトの大活躍、続いて1968年メキシコ、オリンピックより独立参加した東独の活躍はステート・アマチュアーと言う名のもとに活躍をはじめた。しかし1989年のベルリンの壁崩壊、続く1991年ソビエトの崩壊により、彼等のスポーツにおける活躍の裏面がえぐり出された。それは薬物による筋力の増強、記録の更新であった。

人間の身体は機械のようにそれほど極端にその形態、機能を変え発達させうるものではない。従って、人間の肉体から生み出される記録はそれほど大きく変化させられるものではない。機械化のはじめの頃（1903年）ライト兄弟（アメリカ）によって飛行機は地上から機体を浮かせ、空中を飛行することに初めて成功した。これが人類初の飛行機の飛翔とされている。ところがこの機体の出したスピードは時速でたったの15㎞ でありその飛翔距離も260m であった。現代マラソン（42.195㎞）を走る女子の一流選手でもそのスピードは時速19㎞ ほどである。ところがいまや数百名の乗客を亜音速で飛ぶ旅客機の出現、またスピードではジェット・エンジンで音速の3倍を越え、ロケットでは重力を相手とせず物体を宇宙に送り出すにいたった。一方人間のスピードは過去100年で100mのタイムを一秒余短縮したにすぎない。いまやほぼその頂点を迎えて1/100秒（約ランニングで約10㎝）で世界記録の突破を競うほどに限界が近づいた。それでも観衆は喜んで応援し、感動をうけてくれる。人間は未知なものには凡て驚異を感じる。最近の読物調査では、スポーツものが首位を占めている。スポーツはそれを行う競技者と審判（競技を実際に行った経験のある熟達者がのぞましい）そして観衆の三者のハーモニーによってより好成績、良いプレーが成立するものである。

近代のスポーツははじめからメディアの応援があって発達して来た。殊にTVの発達はスポーツを広告の材料として使用しはじめた。企業はこれを利用して資

本を拡大し、今や選手が企業、メディアにあやつられるようにさえなってしまった。商業化は益々広がるばかりである。こうした現状を迎えるまでアマチュアーはどのような経過を歩んで来たのか、その将来はどうなるのかを考えて見なければならない。

以下、オリンピックが回を重ねるに従い、又1983年から始まった陸上競技の世界選手権をも視野に入れながら特に陸上競技でアマはプロはどんな道を歩いて来たかをも視野に入れながら検討していきたい。

古代のオリンピック

古代のギリシアでは葬儀で死者を弔い、祭典では神（ゼウス）に捧げるために各種のスポーツ競技（Athletics）が行われた。その後者の代表的な祭典の一つにオリンピック（エリス）の競技会があげられる。この競技では人間の基本的な力、スピードが競われ、次いで跳躍、投げることが競技会の中心であった。そのはじめはBC-776年に走る競技（スタジオン、これは当時の尺度の基準であり600-Footであることが遺跡から残られた礎石（今考えればスターティング・ブロックに相当するもので、スタートの位置、ゴールの位置をはっきり示すのに極めて正確で、レースを進行するため極めて有効な方法であった）からその間の距離が192.27mであることがわかった。現代の二百米直走路競技といえるものであった。図1はそのレースの姿が壷絵に残されたものを復元したものであるが、この絵の走法は並大抵なものではない。現代に通用する身体の使い方である、股の開きの大きさ、よく前に引き出された脚、蹴った後足の足首が身体を前方に押しだすために有効に働いている。頭は前方を直視し腕は大きく振られて脚力を生かすのに十分な働きを示し、特に指先が伸ばされて使われている、まさに現代の技術である。競技会の第一回からこれほど秀れた走法が用いられたのか、と思いたくなるが、古代ギリシヤの各都市では幼少より防御のための戦士に育てるため厳しい鍛錬を施す厳格な教育が施され、又前述のような各種の祭典にはスポーツ行事としてランニングがメインスポーツとして行われ、長い歴史の中でこうした美しい走法が磨き上げられたものと思われる。

さてこのオリンピアにおける競技会での表彰にはオリーブの枝からなる王冠が与えられたが、後にはスタジオン競走（先に示した192．27を走るレース）の勝

者にオリーブ油100壷、現代に換算すると1580万円ほどのものが与えられたと言う。現代世界の著名なマラソン大会で優勝者が世界最高記録で獲得（記録賞と優勝を合せて）する賞金とほぼ同等の価値あるものが与えられたことになる。現代もトラック競技の中で最も人気のある種目は100米レースであるが当時も人間が力一杯走り抜ける競技に最高の魅力を感じたものと言える。

近代のオリンピック

オリンピアの廃墟

オリンピアは393年ローマのテオドシウス帝による異教禁止令により293回連続した大会も廃止され、神域も破壊された。しかし近代に到り1766年英国のチャンドラーによる廃墟の発掘が発端となり、ドイツ、フランス等の協力を得て19世紀末までに神殿、付属設備等が白日のもとにさらされた。しかし20世紀に入ってもスタジオンの行われたスタンドの全容は解明されないまま、1958年に発掘は終了した。私がオリンピアを訪れたのは、その翌年の1959年夏のことであったが、当時はアテネを朝出発してオリンピアについたのは夕暮れになるほどの時間がかかった。そして目についたのは土の斜面のスタンドに二ヶ所大きな穴が竪に掘られていた。それは観覧席が石組みで出来ていたものと想像しその石組みを目当てに発掘したが遂に石組みとおぼしきものは出土しなかった。その結果、スタンドは土盛りの斜面を利用したものであろう、ということで発掘は中止となったものだという。私の第二回の訪問は1987年であったが、このとき驚いたのは競技場入口の門（有名なアーチ型の門）に向かって右に反響廊の石組みの建物があったが、今ではこれがうず高い土盛りになり芝で覆われていたことである。この反響廊はスタンドに対して直角よりやや開いて作られていたが、その反響廊に又やや直角に建てられた石組みの建物に入ったカール・ディーム博士（ドイツ・ケルン体育大学の創立者、1936年ベルリン・オリンピックのオーガナイザー（ヒットラーにオリンピアからベルリンへの聖火リレーを進言）は反響廊へ向かって放射する小さい窓を見つけたと言う。最初何のためかわからなかったが、この窓から“ウォー”と音を出すと、反響廊で反射し、音はスタンドに届いたという。（現代のメガホンを壁に向けて音を出し反射させる方法）しかし今は土がかぶされ、ただ観光客目当ての場となってしまったことがおしまれる。

このように先人の努力が実った古代オリンピアの足跡は、現実のものとなった。

古代のオリンピアは宿泊施設、トレーニング施設、そして神殿（ゼウス、ヘラ)、そこで神に審判に誓い競技に出場というように競技は神聖なるものであった。

前述のように莫大な賞品は最初与えられたものであり選手の側から求めたものではないように思われる。

ピエール・ド・クーベルタン

クーベルタンは近代スポーツ発祥の国英国に着目、又古い伝統にとらわれない新しい国アメリカにその目を向けて留学、両国のスポーツ事情を研究、大衆スポーツとして英国のジェントルマンスポーツを基礎に、オリンピックを復活させようと、1894年世界に呼びかけた。

しかし未だ海を渡るには船、海外との交流の少ない時代であり、ヨーロッパの独立諸国に呼びかけた。クーベルタンのオリンピック復興には列強の代表にアマチュアの概念をはっきりわかってもらうことが第一であった。そのアマチュアー観とはもしもスポーツによる金銭の所得が永続で、実際に価値を持つならば、即ちプロフェッシヨナルだと。しかし現代にこれを持ち込んでもこれはなかなかむづかしい解釈といえる。まず永続的ということに関しては、スポーツの現役を退いても年金が保証されれば別だがスポーツ全般を通して見ても、肉体を労使して行うスポーツでは無理なことである（思考スポーツではプロフェッショナルとして通用している）。しかし1990年までの社会主義国家ではこのような保証があったような噂が流れていたが、その真偽のほどはわからずじまいに終わった。

クーベルタンの呼びかけに応じた列強の代表はスポーツに造詣の深い者たちではなかったようで、クーベルタンの高邁なアマチュア精神にはあまり関心がなかったようでアマチュア問題はとり残されてしまったようだ。

しかし、それでもオリンピック委員会が組織され大会を開催することが決意された。

オリンピック以前のプロとアマ

英国は近代スポーツの生みの親であるだけにイングランド、スコットランド、アイルランドの各地域からそれぞれ独得の競技種目が生まれた。イングランドの

城主は自らかかえるフット・マンと呼ばれるランナーを、他の城主のフット・マンと走らせ、賭の対照とすれば、スコットランドでは跳躍、投げると言った各種の競技（丸太、石の持ち上げ）更にハードル競技もここで生まれた。いわば近代の陸上競技は凡て英国で生まれたと言ってよい。この動きは18世紀に入ってプロランナーを生み表1に見られる各種の競技と記録を生み19世紀はその全盛時代を迎えた。したがってアマチュアより競技力のあるプロフェッショナルランナー（以下プロ）をおいて大会をアマチュア（以下アマ）に限定することには沢山の意見の対立があったと思われる。そのプロとアマの記録を表1で見てみよう。

まずここに示された競技種目は英国ではじまったものであるから殆どヤード、マイル制であり跳躍もフィートを米換算したものである。このアマとプロの成績がどの程度のものであるかを比較して見るために、1896、1912年のオリンピックの記録と現在の世界記録を右側に記載しておいた。最初におどろくことは18世紀に既に4つの長距離種目の競走がはじまっていることである。当時日本は未だ長崎を窓口とした外国との交流が許されている時代に先ず１時間競走が行われている。何と時速18km で走破18,589m を記録している。続いて2マイル、10マイルと長距離が続き、次いで世紀の末にはじめて中距離の1哩レースが出現している。（1哩は彼等の里程標として重要な地位を占めている。以後現在までヨーロッパで最も人気のある競走である）。19世紀に入ると、短距離、跳躍、投擲がプロの世界ではじまり、アマ相手の商売が、又、プロの賞金目当ての競技会は全盛期を迎えることになった。この記録の中で注目していただきたいのは、1896年アテネ・オリンピックの記録である。左側のプロ・アマの記録が右側のオリンピックの成績と比べて極端に低いことである。100m で見ると12秒0は如何にも低すぎる。実は１位のバーク選手は、アメリカで既に10秒8で走っている強者であった。ところがアテネの競技場はオリンピアの遺跡をもとに作ったため、土質は砂を加えた柔らかい走路であったため、凡ての種目の記録が低かったわけである。

さて再びプロ、アマの記録にもどろう。プロは賭金、賞金目当てに力をつけ技を競い記録の向上を目指したのであるが、アマはいったいどうであったのだろうか。

貴族、資本家、軍人、労働者は彼等の枠の中でお互いに競いあったが、時代が下るに従い身分を見栄を捨てて次第に合同で試合をする気運が進んだ。

しかし何と言ってもオリンピックの核になる競技者の出現に最も大きな根幹となったのは学校スポーツであった。事のはじめは1837年イートン校におけるクラスの対抗競技に続いて1850年にはオックスフォード大学、そして最初のインターカレッジが1857年ケンブリッジで1860年にはオックスフォードで開催。次いで1864年オックスフォードとケンブリッジの対校競技が（インターカレッジ）クライスト・チャーチグランドで開催された。

しかも二年後の1866.3.23アマチュア・アスレチック・クラブ主催の英国選手権大会がロンドン、次いで1880アマチュア・アスレティック・アソシエーション（以下Ａ．Ａ．Ａ）の選手権大会が開催された。参考までに両者の記録を見ると以下の通りであり表1と比較されたい。

	OX:Cam	AAA
100y	10”1/2	9’ 4/5
220y		21.0 3/5
440y	56”.0	49”.0
880y		1:53. 2/5
1mile	4’:56”.0	4’:18”. 1/5
3mile		15’:36”. 1/5
120yh	17”3/4	15”2/5
220yh	26”3/4	
走幅跳 MJ	1.65m	1.97m
走高跳 LJ	5.48m	0.86m
砲丸投 SP		13.23m
円盤投 HT		41.90m

註・秒以下の 1/2・3/4 は一秒を 4 分割のストップウォッチ
・1/5・2/5・4/5 は一秒 5 分割のストップウォッチ
・この時代は未だ 1/10 秒のストップウォッチ精密なストップウォッチは出現していなかった
・y はヤードで 1 ヤードは 91.44cm
・mile 1imile ＝ 1609.34 m
　　3 〃 ＝ 4828.03 m
・yh はヤードのハードル競技

英国に次いで近代スポーツに最も貢献したアメリカは、英国におくれること10年で USA チャンピオン・シップがニューヨーク、アスレティッククラブで開催され1880にはアマチュアー・アスレティック・ユニオン（AAU．アメリカのアマチュア・スポーツの連合体）が創立された。

英、米ばかりではなかった。アメリカへのスポーツの移入はただ書物や、指導員による伝達の他に沢山の移民がヨーロッパ各地から流れ、アイルランド、イン

グランドからは直接選手の移民が見られた。ヨーロッパへの移入も直接選手から選手への伝達も行われた。特にフランス、オランダ、スェーデン、ドイツ、フィンランドの移入は早期から行われた。

アマチュアの競技力は充分とは言えなかったが、兎も角、オリンピック開催にこぎつけた。会場はアテネ、現存するスタジアム（1992年世界選手権のマラソンはこの競技場をゴールにした。その優勝は光栄にも日本の鈴木博美選手であった。ギリシヤは2004年アテネオリンピックのマラソンゴールをこのスタジアムにすると報道された）が舞台となった。馬蹄形のスタジアムの中に作られたトラックはフィールドの幅が28m、直線が長く急カーブのトラックである。（円盤投で投擲角度が少し狂うとスタンドに飛び込む。客はこの危険を知っていて、ちゃんと席があいている。）スタンドは全面白色の大理石、世界で最も美しいスタンドと言っても過言ではない。ここに13ヶ国の選手が集まり、陸上競技は4月6日より10日までの5日間行われた。国民は来る日も来る日も1位がとれずなげいていたようであるが最終日のマラソンでギリシヤの選手が優位との情報に喜び、スピリドン・ルイスが競技場に入るや、皇太子と皇弟がスタンドから下りて伴走してのゴールであったという。しかもマラソンは全競技を通じて24名の参加で最も競技者の多い種目であったにも拘わらず、1，2，4，5，6位をギリシャが占め大成功であった。後日第二回大会がパリーに決定すると、オリンピックをギリシャから盗んだと怒った話が残っているが、それどころではない。

100m	5位	カルユコンディリス
800m	3位	ゴレミス
1500m	5位	フェスティス
	6位	ゴレミス（800とは別人）
棒高跳	3位	テロドロホウロス　2.85m
	4位	ダマスコス　2.80m
	5位	キダス　2.80m
三段跳	3位	ベルサディス　12.52m
	5位	ズミス
	6位	ハルココンディリス
砲丸投	2位	ガウスコス（1位11．22と2㎝の差）11.20m

	3位	パパンデリス　10.36m
	6位	ベルシス
円盤投	2位	パパスコボポウロス（1位との差5.5㎝の差）28.995m
	3位	ベルシス（砲丸投のベルシス）
	5位	パパンデビス
マラソン	1位	スピリドン・ルイス　2°　.58'.50"
	2位	バンラコス　3°　.06'.03"
	4位	ヴレトス
	5位	パパンネオン
	6位	デリヤニィス

上記の記録を見れば万々歳というところであった。

第二回大会はパリー市での開催となった。クーベルタンは自国の開催であり、前述アテネ市から外国へ大会を引き継いだ関係もあり、どうしても成功させなければならない破目にたたされた。ところが組織委員会の内紛、加えてパリー万国博覧会のあおりを受けて大会の開催に力が借りられず（プログラムに表記された大会の名称は「フランス共和国1900年万国博覧会国際競技会」となっておりオリンピックの名称は使われていなかったようだ）、そのうえプロとの縁（主競技場（図2を参照）はパリーのレーシング・クラズを借用しての開催）が切れず賞金レースまで加わり、初の汚点を残した感があった。しかし陸上競技の各種目ではトラック、特に中距離では英国が伝統的な力を出しアメリカがフィールド競技で優位に立ち大会を終了した。

初のプロ問題で汚点

第五回はスェーデンのストックホルム市での開催となった。今迄の大会では英国を中心とする国々はフィート、マイル制を、フランスは米制をとって来た。この二つの流れは長い習慣となって国民の間に根付いているため、どちらに変えても、どちらかがしっくり感じとれない不合理性があった。特に陸上競技は記録の競技であるためこのことが最初からの問題であった。それはまずトラックの長さが問題の第一であった。

第一回　アテネ　333.33m（×3　1000m）

第二回　パリー　500m
第三回　セントルイス　536.45m（×3　1mile）1609.34m
第四回　ロンドン　536.45m（×3　1mile）
第五回　ストックホルム　400m（どの種目もゴールが一ヶ所）
（現在、世界の新設トラックは凡て400mである。）

当時は各国の国情にあった作り方であったが、第五回大会は極めて画期的なことが行われたわけである。又時間の計時も精密時計の生産がはじまり、この年の記録から国際陸連（1913年から正式発足インターナショナル・アマチュアー・アスレティック・アソシエーション、頭文字を合わせてIAAFと言う）の公認記録としてあつかわれることになった。

今大会は表2で見られるように競技成績も軒並みに上昇したが、その最も顕著なものがジム・ソープ（James Francis Thorpe）であった。彼は非公式な五種競技（Pentathlon）休む間もなく（他の五種競技者は次の十種競技出場のため休養をとっているあいだに）走高跳に出場（8月17日）して四位に、又同日走幅跳に出場。決勝で七位に入賞、一日おいて8月20日から3日間の十種競技（Decathlon当時は第一日に三種目、第二日に四種目そして最終日に三種目が行われた。現在は五種目ずつ二日で終了する）に出場、抜群の競技力で他を圧倒し優勝に輝いた。後に述べることになるが第四代のIOC会長（ブランデージ氏、ミスターアマチュアーの異名あり）もこのオリンピックに参加、ソープと同じく、五種競技に参加し5位に入賞している。
（註．ブランデージは五種目競技の最終種目の1500mを棄権している。仮に1500mを走っていると、順位の決定が、各種目出場者7人の順位、1位から7位までの各種目順位を加えた数字が決勝順位なので3～4位にまでなれた可能性もあった。）

さてジム・ソープの勝利はその成績を見て並み居る列強国の幹部を驚嘆させた。しかも彼はやり投にいたってはたった三ヶ月前にはじめて握ったものであり、十種競技を競技したのもはじめてであった。この優れた競技内容はこの成績を1948年ロンドンオリンピック（戦後初のオリンピック、日本は招待されなかった）の成績に当てはめると銀メダルに相当する当時としてはまさに大記録の樹立であった。

世界のヒーロー　ジム・ソープ

ゴールド・メダルに輝いたソープに表彰式が終わると、ソープの勇姿に驚嘆したロシアの皇帝ニコラスは宝石をちりばめたトロフィーを、地元スェーデンのキング・グスタフV世はブロンズの胸像を贈ると共に“Sir you are the greatest athlete in the world”と賞賛すればソープも感極まって言葉少なく“Thanks,King”と礼を述べられた、と言う。

アメリカに帰ったソープはまさに国民的英雄であった。ニューヨークのブロードェイのパレードにソープは驚嘆した。ソープは自分の名前を声はり上げてさけぶのを聞き、信じがたいほどの友情にしたった。

逆転

ところが1913年を迎え事態は逆転してしまった。1909年と1910年ノース・カロライナの小さな野球リーグに一週間ほどプレイして25ドルを得ていたことがあばかれた。

プロフェッショナル・アスリートがオリンピックに参加することは無資格である、ということが厳しく明言された。ソープはAAU（前出）の委員長ジェームス・E・サリバンに手紙を送り、寛大なる処置を願い出た。彼は自分の行った行為を認めるが、それは21才～22才のインディアン・スクール在学中のことで、他の者も同じ行為を偽名を使ってやったが自分は悪いこととは知らず実名で出場したこと、とAAUに裁きの寛大なることを願い出た。大衆の彼に対する態度は寛大なるものであった。一方AAUは彼にきびしい裁きを示した。そして彼の名は記録本から抹消され彼のメダルとトロフィーはIOCに返還されると同時にAAUはIOCに対して陳謝するという事件であった。その結果両種目の二位の選手が繰り上げられ勝者となり、メダルが贈られた。先の彼が大衆うけのよかったことは次の事実でもわかる1932年ロサンゼルス・オリンピックの際、彼は副大統領チャールズ・カーティス（彼にもインディアンの血が交じっている）の招きをうけスタジアムで同席の名誉に浴した。

1950年AP通信の記者がソープは20世紀前半における世界で最も偉大なるアスリートである、と記事にすると翌年これをもとにバート・ランカスターによってJim Thope All Americanと言う映画が制作された。彼はこのようにアメリカの大

衆には完全に復権したが、1943年にはじまった彼の復権運動にも、IOC（会長アベリーブランデージ1952—1972）は頑としてアマチュアのルールを曲げることはなかった。

しかし、1982年10月13日 IOC は遂にジム・ソープの復権を認め IOC の記録本に再登録メダルはロサンゼルス・オリンピックの前年1983年1月18日彼の子供に贈られた。ソープは1953年3月28日癌のためになくなったのであるが、彼の復権は死後20年を経てのことであった。家族に贈られたメダルに対する娘子の態度も立派であった。このメダルはソープ家におくべきものではない、とスポーツ記念館に贈られた。

日本初のオリンピック参加

日本のオリンピック初参加は1912年であり、時代は明治から大正に移る明治45年（大正元年）のことである。この参加の問題に先立ちここに到る経過と日本国内のスポーツ事情にふれてみることにする。

陸上競技が日本にもたらされたのは1874年のことである。それは日本海軍の教官としてイギリス武官を招いたことにはじまる。その教えの中から海軍兵学寮の競闘遊戯会がはじめとされている。ついで二年後明治九年（1876年）にはマサチューセッツ工科大学長ウィリアム・スミス・クラーク氏によって、短距離、中距離、跳躍競技に加えてその後長い間日本の小中学校の運動会で行われた麻袋で出来たサック競技等が伝授された。しかしそれは海峡を越えた北海道でのことであった。下って1884年（英国やアメリカではこの当時全国組織のスポーツ団体、前述の AAA や AAU が組織された時代である。）万能スポーツマンとして京浜外人間のスポーツマンだったストレンジ氏の渡日であった。彼は教師の仕事のかたわら競技会を開催し、長距離、円盤投、やり投、三段跳を除く広い範囲で陸上競技が指導された。

ここで大切なことはスポーツを行ううえでの心得が教えられたことであった。即ち「競技において最も尊いものは最善をつくして心残りがないようにすることだ」「運動の奥義は情念を鍛錬することにあって、筋骨を鍛錬するだけのものと思ってはならない」と美しいスポーツマンシップについて教えられた。これは日本の武道の精神にも相通ずるものであった。

この流れをくんで全国各地の大学にまでスポーツは浸透し明治33年（1900年）には競技の実施方法も英国のヤード制に代えて米制が採用されはじめた。当時を回想すると、田中館愛橘と藤井実の二氏の名がうかぶ。後者は東京オリンピック（1964年）の頃未だ健在でオリンピック候補選手の激励にあらわれたが、昔の日本人としてはめずらしい大男であり厚い胸をつき出し、昔話をし、檄をとばして下さったことを思い出す。氏は1902年棒高跳で3.075の日本記録を作ると1906年までにその記録を3.10m、3.255m、3.66mそして1906年には3.90mの世界的な記録を、又1902年には100mで10秒24の夢のような好タイムを残した。この10秒24の1/100秒時計を開発したのが前者、工学博士の田中館愛橘氏だったのである。この記録でオリンピックに向かい出場し、オリンピックでこの記録、あるいは近い記録が実現していたら、と残念に思われる。この記録はアメリカにも報道されアスレティック・アルマナック（スポルディング社発行）に上述の凡ての記録が記載されたという。

しかし当時の日本は、日清、日露の戦いに勝利し、新たなる軍備への真っ最中であった。

スポーツの社会でも海外の新しい用具が輸入され、スパイクシューズも用いられるようになった。その最初にスパイクを用いた選手は明石和衛であった（それまでははだしであったようだが、ペストの騒ぎで足袋をはくようになった。これが後のマラソン足袋に発展していく。）

日本にもいよいよオリンピックへのムードが高まっていくが、19世紀の終わり頃から日本ではロード・レースが盛んに行われるようになり長距離にも優秀な選手が現れた。そして第五回オリンピック・ストックホルム大会の予選の準備がはじまる。先ず体協が組織され1911年羽田に陸上競技場が新設され、代表選手選考の競技会が行われた。

この予選会には参加資格として次の様なルールが揚げられた。

1）年齢16才以上の者
2）学生たり紳士たるに恥じない者
3）中学校あるいはこれと同等の諸学校の生徒、卒業生及びかつて在学した者
4）中等学校以上の諸学校の学生、卒業生及びかつて在学した者
5）在郷軍人（兵役義務を終え予備役となった者）会会員

6）地方青年団員、その他の者で市町村長の推薦状を持った者

マラソン競走（25マイル）に参加しようとする者は、前項規定のほかに更に医師の健康保証書を必要とする。

とした、この参加者は91名であった。（一国で91名の参加は驚くべきこと）

さて前述の羽田競技場は京浜電気株式会社と交渉し、毎年競技会を開催するという条件（一回の使用で終わった）で従来の自転車の教習場をトラックに変えてもらったものであった。一周は米制で400mでカーブの外側が高く作られ、その高低差が75糎の勾配と誇っていたそうであるが、（これでは自転車でもカーブが切れるほどのもの）現在は1/100の勾配しか認められない。土には砂を加え苦汁で固め100米だけはコースに石灰で白線を、その上にヘッグを立てテープを張った走路であった。（図２参照）

さて前述の参加資格であるが、どうも紳士協定で、アマチュア・プロフェッショナルの文字は全く見られない。

いずれにしても競技の成績は貧弱ながら終了し、短距離に三島弥彦、マラソンに金栗四三の二氏が代表として選ばれた。二氏の出発は５月16日敦賀よりウラジオ（浦潮）に渡りシベリヤ鉄道で５月末ないし６月１日頃ストックホルムに到着の予定であった。三島の400mのタイムは世界とあまりにもかけ離れていたが、米国大使館の書記キルエリフ氏の指導をうけて59秒３から50秒に上昇したと当時報じられている（東京朝日　明治45年4月22日）オリンピックにおける結果は200米に出場4着となり落選。期待は金栗のマラソンにかけられた。しかし7月14日レースの日は酷暑にたたられ1/2数の選手が40，200米のコースの半ばにしてリタイヤしたと言う。金栗氏も15粁でリタイヤと（大毎）毎日新聞、東京朝日は15粁（当時15基米とある）で倒れたが身体は幸い無事。失敗は靴のため、金栗選手は17哩走った後中止したと言う。更に東京朝日は、白人側にては同選手の底に釘を打ちたる靴を用いたること、その原因なりとなし居れり、最初金栗氏に深甚の情を注げる英国人等は、かかる靴を用うるなからんことを勧告、金栗氏は忠告を聴かざりしと言う（更に以降は東京朝日明治45年７月16日を原文のまま引用）。とても信じがたいことである。

かくして日本の代表は世界との差を感じつつ、金栗は帰国。三島は留学のためヨーロッパに残った。

この頃より日本の長距離熱は高まる一方であった。

翌1913年日本に極東体育協会（フィリピン・中国）より極東大会（Far Eastern Games）への勧いがかかった。（当時は東洋オリンピック大会と称した）この第一回の試みは米国の極東政策としてフィリピン開発にたずさわった初代比島体育協会主事エルラッド・エス・ブラウンの企画で東洋諸国に呼びかけたものであった。日本は体協会長の嘉納治五郎氏がオリンピック出張中でのこと。手はじめに長距離に活躍中の田舎片、井上の二氏を派遣したが５哩の短縮マラソンで両氏が１．２位を占め、日本はいよいよ長距離への邁進が始まってしまった。

オリンピックを別にすればこの極東大会は世界初の国際大会の元祖となった（この大会は昭和九年第十四回大会をもって終わりを告げた。日本は大会終了後の会議で満州国参加の問題を出し、中国代表は総退場をもって、この会議は流れ極東体育協会は解消した。）

競走、跳躍、競技規定

話が先に進みすぎたが、1912年のオリンピック後に話を戻そう。続くオリンピック大会は1916年ベルリンと決定していたが、第一次世界大戦で中止となった。大戦では日本も連合軍に加わったが日本国内は平穏であった。その翌年の1917年（大正六年）大阪朝日新聞運動部が前述の極東体育協会（アメリカの指導が及んだものと思われる）の諸規定をたたき台にし、オリンピック大会の競技規定、日本体育協会の規定等を参考に、東西代表の春日弘、明石和衛氏ら六名を招いて模範的規定を起草し、関係者の協賛を得て規約を決定した。

その内容は第二章に競技者、第十二条に競技者資格をうたっている。即ち

一、年齢満15才以上の男女にして本会の規定を承認したる者

二、左記の各項に該当する者は競技者たるを得ず

（イ）職業的競技者及び職業的に非ざるも職業的競技者の団体に加入する者

（ロ）主として体力又は脚力を以て職業となし居る者

（ハ）品性其他の点に於て本会の主旨にもとれると認めたる者

前述の規約についても同じであるがアマチュアと言う語がここでも見当たらない。それに（イ）に述べてある職業的競技者に該当する者は存在したのであろうか。（ロ）では車夫はあきらかに該当者になると思われるが、これも英国の貴族

社会が作った旧いアマチュアールールを参考に作られたものの様に感じられる。

世界のスポーツと言ってもヨーロッパ諸国はこのあと1920年まで大戦のため長い眠りに入ってしまった。

第一次世界大戦後のオリンピック

ヨーロッパ・コンチネンタルが戦火に巻きこまれているあいだスカンジナビア半島、隣のフィンランドは独立への道を淡々とねらっていた。その指導者の一人にケッコネン氏がいた。氏は後に大統領にまでのぼりつめるが、若き時代は青年のスポーツの指導にあたり、練習に集まる選手を相手に独立への気運を盛り上げる働きをしていた。1912年のストックホルムオリンピックで一言もふれておかなかったが、1912年に彗星の如くあらわれたハンネス・コーレマイネンがあった。表3で示すように5000m、10,000mの第1位がコーレマイネンである。しかも初めてオリンピックで採用された長距離で二冠を獲得したばかりか記録も14分36秒6の大記録である。フィンランドにとっては独立へ向けての国民の士気をを鼓舞する上でもこのうえない贈物であった。

時は流れ、大戦はヨーロッパ全土が疲弊のうちに終戦となった。この戦いで最も被害をこうむったのはフランス北部、これに接するベルギーであった。ベルダンの戦いは約2ヶ月続き死者37万人、ソンムの戦いは4ヶ月余の激戦で一日に万余の兵士が倒れ、両軍合わせて110万の戦死者を出す悲惨な戦いであった。この被害を最も大きくこうむったベルギーの青年に何よりの贈りものとしてクーベルタンはオリンピックの開催を決定した。アントワープ市である。戦後の疲弊の中ではあったが参加国は前回のオリンピック（1912）の28ヶ国に対して29ヶ国（ドイツ・ハンガリー・オーストリア・トルコが招待されないにも拘わらず）であった。この4ヶ国の不参加に拘わらず一ヶ国増加したのはエストニア・チェコ・ユーゴスラビアの独立があり参加があったためである。

こうしたヨーロッパの国情のなかで、フィンランドは独自の道を歩み続け、陸上競技の熱は高まるばかり、層を厚くし記録は向上していった。それはただ独立への道ばかりが原因ではない。表3のコーレマイネンの記録を見ると、二位のブーアン（フランス）との差はたった0.1秒の差である。14分36秒6といえばベルリン（1936）オリンピック大会で活躍（4位）した日本の村社講平選手の14分30

秒0に近い記録である、ブーアンあってこその大記録であった。

このレースはブーアンの先行ではじまりコーレマイネンがこれを追う戦いであったと言う。二人は集団から先行し、コーレマイネンは何度もブーアンを抜こうとするが抜かせない。遂に最後の一周になり、凡てのコーナーを廻りホームストレッチに入りコーレマイネンが肩一つ出してのデッドヒート。そして20㎝ の差でのゴールであったと言う。ゴールして、ブーアンは一言“ハンネスはすごい”オリンピックにはじめて採用された5000m、ジム・ソープの強者と合せてストックホルムでの華麗を越えて凄味に満ちたレースであったろう。

こうした先人が業績があってフィンランドには次代を次ぐ凄物の出現が見られるのである。

コーレマイネンはその後アメリカに渡り修業を積み、表3で見られるように8年の空白を経て1920年アントワープのオリンピックでマラソンの勝者となりフィンランドの長距離ランナーの先頭に立った。

パーボ・ヌルミの出現

ヘルシンキスタジアムの入口に高いランニング姿の銅像が立っている。ヌルミのランニングの雄姿である。フィンランドの宝物なのである。表3で見られるようにパーボ・ヌルミ（以下ヌルミ）は1920、1924、1928、アントワープ、パリー、アムステルダムの三つの大会で大活躍を示したまさにフィンランドの英雄であった。彼は少年の頃からランニングに秀で、大人と一緒に試合にも出場したと言う。練習は相手がなく何時も一人、しかし彼の手中には何時もストップウォッチが握りしめられていた。彼は時計相手にペースを刻み、それこそ刻々と歩を刻み記録への道を開き大成したランナーであった。

そしていったんオリンピックに出場がはじまると同僚リトラ、ルイコラ、アンダーソン、ラバ・プルジュと共にオリンピックの中、長距離を荒し廻り沢山の金、銀、銅メダルをフィンランドにもたらした。そしてよき後継者、イソホロ、アスコラ、サルミーネン、ビルターネン等を輩出させ、第一次大戦後からベルリンオリンピックまで５回のオリンピックで“フィンランド強し”の名を世界に知らしめた。しかしその彼にも魔の手が次第に彼の身に入りはじめた。

ヌルミの世界記録

1921	10,000m	30'：40".2	ストックホルム（スウェーデン）
1922	5000m	14'：35".4	〃
1924	5000m	14'：28".2	ヘルシンキ（フィンランド）
1925	10,000m	30'：06".2	クイピオ（フィンランド）
1930	20,000m	1°：04'：38.4	ストックホルム

彼は三つのオリンピックにおけるメダル獲得の外に1920年アントワープ大会以降上記の世界記録を樹立している。

ここでは五つの記録とその競技会の開催場所を示しておいたが、彼の人気をヨーロッパ各地の都市が放っておくはずがない。各地からの招待でレースが行われるわけである。現在でもよく行われる都市を見ると、オスロ、イェーテボリ、ストックホルム、ヘルシンキと言った都市は今でも毎年夏に競技会を開催し特に中、長距離に適した気温と湿度が適度のため世界のランナーが集まり、世界記録の樹立に向け覇が競われる。そこでこの招待者に支払われる旅費、交通費、日当が常々問題になって来たのであり、これがアマチュア規定の中で一番の問題点なのである。

更にこの競技会に参加して失われる日数に対する補償問題（就職している者が職場の放棄した日数）が更に加わるのだ。英国やアメリカ（英国の流れ受けている）はこのための補償は認めない。北欧は、認める（或る程度認めないと選手は生活の保証がない）と言うことである。（このことは戦後におきるアマチュアの処でのべることになる）

ときは1932年ロサンゼルス・オリンピック（日本は前回織田の金メダルに続いて南部が同じく三段跳で15米72の世界記録での金メダルを獲得した大会）を前にした（以下北沢清の遺稿より）３月３日Ｉ・Ａ・Ａ・Ｆの臨時総会でブロークンタイムペイメント（前述）についての議案が各国代表者の間で火花が散らされるであろうと予測されていたが、アマチュアスポーツ界にあっては大問題であり、純理論では一概に律せられないので議題としてとり上げないとなったという（1932. 3. 3大毎）

ところが月が変わって４月５日の東西各紙は長距離界の第一人者パヴォ・ヌル

ミがアマチュア資格を喪失して今後一切の国際競技に出場を禁止されたことが報道されたという。さらに4月4日発大毎特電は、不出世の韋駄天パヴォ・ヌルミのアマチュア資格喪失に関して討議されたI・A・A・Fの秘密会議に列席しその証拠陳述を聞いた某氏の話では、ヌルミがアマチュア定義に違反して莫大な金銭上の報酬を要求した二つの事件が立証され遂にこの決定が下されたもののようだ。アマチュアリズムの純潔擁護のため仏国代表ジュネ氏は（仏国陸上競技連盟会長）はこの問題をとりあげて正面から痛烈な攻撃の口火を切り、遂には仏国の寵児ラヅメーグ（表3　1928、1500　2位で1000m、1500m、2000m　3／4哩　1哩の世界記録保持者）がフィンランドに招聘された際新婚間もない彼が愛妻の旅費を請求したり、またラグビー試合のハーフタイムにトラックを走って報酬をうけたことなどの問題から仏国陸上競技連盟が涙を呑んで裁いた一件をひとくさり陳述してフィンランド代表の反省を促した。さらにスエーデン代表エドストローム氏（I・A・A・F会長）も立って仮借なくヌルミ選手の歴然たる職業的行為を指摘したため居流れた各国代表もこれに満場一致の賛同を表したのである。

フィンランド陸上競技連盟は狂気のごとくになった。直ちに証拠の調査にのりだしたが、それは弁護と釈明に少しでも余地が見出せればヌルミのため祖国soumiのため敢然世界の裁きの庭に抗議すべき気構えだと察しられる。だが掩うべからざるヌルミを包む疑惑は全く弁明の余地すらないと信ぜられる。

受難のパヴォよ

この会議で扱われたアマチュアの当時の概念を重ねて記しておこう

△金銭もしくはこれに等しき利得を目的として競技するもの

△競技出場の欠勤による利益の減収または給金の損出を名として直接間接を問わず金銭を受領すること

△運動競技の事業につくことまたは金銭受領を条件として競技会に参加すべきことを契約すること

△商店、製造家またはその代理人より報酬を受けてその物品、機械を使用し、または自己の氏名をこれ等の商店または製造品の広告推奨に利用せしむること

などを犯すものはI・A・A・Fからプロフェッショナルと解釈されるのである。

第一次世界大戦後から世界の檜舞台にのぼり、勝利、世界記録の樹立をほしい

ままにして来たヌルミ、彼の最後の望みは1932年ロサンゼルス・オリンピックでマラソンに優勝し、コーレマイネンのマラソン優勝の上に自分の優勝を重ねることであったろうか。コーレマイネンは1912年登場8年後の1920年アントワープでマラソン優勝、ヌルミのそれは12年後になるはずであったが、12年の時の流れの中で世の中は進み、スポーツの記録もすさまじく進歩をとげた。観る人を魅了させるスポーツの雄姿が、世の中がスポーツマンを甘えさせたことも純粋であるべきスポーツへの姿を変えさせた（力を貸した）のかも知れない。1912年のジム・ソープの不祥事から20年、オリンピックに又も大きな汚点が残された。しかしこの両氏の行為には大きなへだたりがある。ソープの行為はちょっとした間違いとも受けとれる。しかもAAUに対して事を正直に伝えているが、ヌルミの行為には或る種の奢りがあるようだ。この強さが何を生み出すか、記録の向上と共に自分の力を商品化して評価してしまったのではあるまいか。

ベルリン・オリンピック

ヌルミが1932年のロサンゼルス大会への準備で競技力をつけるあいだに不祥事が生じたが、続くパリ、アムステルダム大会と会を重ねるにつれて参加国は増大し、ベルリン大会には遂に49ヶ国の参加を見た。この大会は施設の面でも聖火リレー（オリンピアからベルリンまで人手でリレーされた空前絶後の大事業であった。加えて競技力でもアメリカのジェシー・オーエンスが100m200m走幅跳、4×100メートルリレーの四種目に金めだるを獲得し、それこそ世界をおどろかせた。しかし彼をアメリカで待ちかまえていたのは貧困であった。そこで彼は自らは望みもしない手段で生活の金を得なければならなかった。馬、犬、モーターサイクルとの競走。しかしこれも一時的な収入であり、恵まれた生活ではなかった。結局陸上競技では興業としては成りたたないと言うことであった。

第二次世界大戦後のオリンピック・ロンドン

第二次世界大戦は独逸、伊太利、日本が枢軸国となり連合軍と戦ったものであり、戦後初のオリンピックには日本、ドイツは招待を受けることは出来なかった。伊太利は途中（昭和18年．1943）から連合国側についたため難を逃れた。さて、オリンピック参加をめぐって、ソビエトはということが問題となった。

IOCはソビエトがステートアマチュアという名目のもとでスポーツ活動を行っていることで参加を見合わせるということになった。続いて1952年はヘルシンキ大会である。

エドストロー氏に代わってIOCの会長に就任したアベリー・ブランデージ氏はソビエトを訪れ、つぶさに現地を見たがプロと断定出来るようなものはなかったと言う。ここで改めてアマチュア観なるものを見直してみよう。戦後日本陸上競技連盟の理事長を務めた浅野均一氏は世界に向けて活躍してゆく日本の立場をそれと照らし合わせて考えてみようと言うことを誌上で述べている。浅野均一氏はアマチュアの考え方には

1) 英国流の考え方
2) 第二はアメリカ流の考え方。これは英国流の考えたアメリカ独自の考えを加味したもの
3) 英米とは社会的な条件を異にす北欧に生まれたアマチュアリズム
4) ソビエト流の考え方である

いままで1) 2) については何か所にわたって述べて来たが、3) の問題は日本にとっては似たところがあり、更に言えば日本は3) の北欧型よりも更にめぐまれた環境におかれていると言っても過言ではないのでこの点を再検討してみよう。北欧のスポーツは社会人を中心に行われている。即ち勤労者のクラブがスポーツ活動の組織的な単位となっている。従ってブロークン・タイム・ペイメントの問題が生じてくる。これは選手が競技に出場して欠勤することによって生じる給料の損失を競技団体が補償することである（日本ではそれどころか会社から出場し、会社のためになっている（強い選手の場合）のであるから給料を会社が負擔するのは当たり前と言った考えが戦前からあった。ところが欧米流ではそうはいかないのである給料の補償をうけることは甚だアマチュア的でない。この点を如何に議論してもI・A・A・Fはじめ各1F（国際的な各種スポーツ連盟）のあいだで結論がでないのである。更にもう一つはソビエトのスポーツである。これは国家主義的アマチュアと言えるものでスポーツ選手は国家に奉仕するであるから国家が面倒をみるのはあたりまえと言う考えである。従って、選手の多くは軍人、警察という国家組織の体力を要するような立場の人が多かった。この考えに立つと日本では逆に民間人は銃を保持することは許されないのでオリンピックで銃を使

用する競技では凡て自衛隊員ないし警察官しか競技に参加することは出来ないと言うとこになる。戦前1932年のロサンゼルス・オリンピックで日本の西中尉は軍人としての職場から選手として選ばれ馬術競技で優勝を果たしている例がある。いわば日本は何でもありの状態がアマチュア競技の中に何の違和感もなく続いて来た。特に外国人（招待選手）に対しては甘いようだ。ヌルミのように自らしかも高額の要求をするようなことがなければ何事もなく通して来たようだ。

アンダー・ザ・ラーブル

1961年朝日新聞にAP電の報道として伝えた記事がある。それはトリニダートの有名な陸上短距離選手マイク・アゴスチニ（1956年（メルボルン・オリンピック）200m20秒1）が米週刊誌スポーツイライストレーテッドに、世界の一流陸上競技選手は金をもらっており、一年に一万ドルかせいだアマチュア選手があると暴露記事を寄稿して注目されている。その内容はヘルシンキオリンピック大会に出場後一競技会で控室にはいったとき世界的に有名な一中距離選手（今でもヒゲを生やしている）が米陸上競技委員に金をくれなければ走らないと話しているのを聞いた。その競技会が終わってから同じ競技委員からアゴスチニにこづかいにと四十ドル渡された。役員もグルであることがわかった。

1958年イギリスで、アメリカでも尊敬されている一イギリス陸連役員からアゴスチニ君、出来るだけ方々の国を旅行し、出来るだけ競技会に出て、うんと金をつくるんだよ、おれたちも困るから、といい聞かされた。

このような事実は、ヨーロッパの招待競技では常識化しているようである。選手が表彰台にのり表彰を受ける際にメダルが渡される。このメダルが実は金貨（オリンピックのメダルは銀、銅の生地の上に金メッキを施したもの）であり、かえりに大会本部へ行けば現金に換えるということが常識化していたようである。こうした行為を危惧する人々の中にドイツのカール・ディーム氏があった。（氏は前述のベルリンオリンピック当時の組織委員であり、聖火リレーの発案者でもある）氏は戦後ドイツのスポーツを再建すべく指導者への啓示とも言える“スポーツの本質を基礎”（Wessen und lehre des Sport（福岡孝行訳））なる書を第二次世界大戦終了後のはやい時期に世に示した。この書の中で氏は“スポーツとスポーツにあらざるもの”と言う項でプロスポーツを興業と決めつけた。従っ

て新聞で扱うスポーツ面でのプロは決してスポーツではなく、その反対のものである。それは事業でありしかも興業的な職業なのだと言い切る。そのうえ新聞は職業スポーツ興業を真正のスポーツに混入しようとこぞって一致協力していると語を強めている。さきにスポーツは選手、審判、観衆のハーモニーによってよりよい成果をあげると述べて来たが、現代のスポーツ（オリンピックまでそうなってしまったが、このことは後に述べることになる）を観る観衆、その試合を報道するメディアはアマ・プロの見境いなしの状態であると言ってもよい。

しかし子供が成長する過程におけるスポーツは全く純粋なものが多いことに大きく目を見開いてもらわなくてはならない。高校の全国大会（いやそこにいたるまでの過程で息の切れる選手もいるかも知れないが）を目指し努力し自分の真の力を出し切って生涯における華としようとする者、更にオリンピックを目指して自己を磨きスポーツに青春の力を全力投球する選手の姿こそアマチュアスポーツの神髄といえるのではないだろうか。又一方では子供のときからプロを目指して自らを磨く者もある。あるいは傍（親、兄弟、コーチ）から教えられ磨いているものもある。球技の精確な技術はそのステレオタイプを作るまでに既に数十万回の繰り返し練習が必要とされている。最近エチオピア・ケニア等から輩出する長距離選手の中には19才、20才で日本人にとっては夢の記録（10000m を26分台で走る）をいとも簡単に走る。目の前でいとも簡単に走られると、どうしてこうも簡単に選手がつくれるのかと思う。しかしその裏には優勝賞金という彼等にとっての大事な魅力が力を出させているのかも知れない。

そこで前述の子供から大人へのスポーツの進む道を考えてみよう。

スポーツの進む段階

1）スポーツ（子供から大人まで余暇を楽しむもの）

2）記録を目指してのスポーツ

3）高い記録を目指してのスポーツ

4）オリンピック・スポーツ（スポーツの頂点を目指して）

1）スポーツという語は元来ラテン語の dispotare　deportare がフランスで desport diport に変わり、北方からフランス北部に侵入したノルマンが定着しフランス語を身につけドーバーを越え、この語をイングランドにもたらし後に di,de の

頭がとれて sport なる語が使われるようになったと言う。元来は仕事から、持ち場から離れて身体をいやすということから広い意味に用いられるようになった。2003年、陸上競技世界選手権の行われたパリーの sant denis は運河、即ち Le port を渡って競技場が建設されていた。port は戸、門、港を意味するがパリーの地下鉄の駅の名称にこの Le port 何々駅をいうのが私がしらべたところでは24ほどあった。昔はこの門をくぐって市街に入り、又街を出て郊外に出る、即ち de port したものなのだろうと私は解釈している。

そこでスポーツとは極めて広い人間活動を意味し、この言葉を持たない国々に外来語として19世紀から20世紀にかけて万国共通語として広まっていった。そして遊びは互いにルールを作り、互いに競い、ルールを作り組織化することによって現代のスポーツは広く普遍的なルールも用いて遊ばれるようになった。スポーツは次第により自分の行動を高級化することによって楽しみの度合いを高め次第に高い成績を求めるようになった。表1で見られるように、自ら成績を高めてプロとして仕事をするものがあらわれ、大衆を相手にすれば、大衆は対抗して自分の力を磨いて成績をあげていくのは極めて自然の流れである。2）前述のように近代における対抗試合はイートン校のクラス対抗がはじまりと述べておいた。この対抗試合は対校試合、地域の国の選手権大会を生み出す。元祖の英国にしてもイートン校のクラス対抗（1837）から英国選手権（1866）が開設されるまでわずか29年であり、続く29年後にはマンハッタン・フィールド（ニューヨーク）でニューヨーク A,C（athletics Club）とロンドン A,C の国際競技が1895年9月21日に行われた。まさに近代オリンピックの始まる7ヶ月前のことであった。

近代オリンピックについては巻頭で述べておいたが第一次世界大戦以前のスポーツの練習は週に2～3回行われる程度のものであった。その競技種目に適した体型と体力（筋力）の持ち主ならば表2で示したオリンピックの初期の成績は出しえたのである。

3）しかし第一次世界大戦で疲弊した各国の国力も次第に回復し財政の余裕が生じると、スポーツも益々盛んになり、国際競技が日常のもとなるにつれ各国の競技連盟の力の入れようも変わり記録も次第に向上を見るにいたった。この間創設された国際競技会を見ると、

極東大会（1913）前述の通り（1934）で中止

南アメリカ選手権（1919）
中央アメリカ・カリビアンゲーム（1926）
英連盟大会（1930）
バルカンゲームズ（1931）
ヨーロッパ選手権（1934）

こうしてオリンピックとは別に世界の各地域はお互いに切磋琢磨し技術の向上、記録の向上をはかった。しかし、これ等大会の目標達成にはオリンピアード（4年）は長すぎる。この中間年に間が途切れる（体力・気力のうえで）のを何とかしようと言うので中間年がえらばれた。戦後（第二次大戦）のことになるがアジア大会も同じ目的で第二回大会からは中間年に実施されている。さて戦前の日本の陸上競技はオリンピックでよく活躍、特に三段跳で三連覇、棒高跳でも連続よい成績をあげているが、さきに述べているように体力的に諸外国に劣る日本選手がどうして良い成績をあげえたのであろうか。それは前述のように諸外国の練習が週2〜3日で楽しんでいる頃、日本は猛練習の結果好成績をあげえたのである。しかし、未だトレーニングの原則を見出すにはいたっていなかった。これが完成するのは第二次大戦後のことである。それはアーノルド／ネッカー（東ドイツ）の二人の学者（医師）の共同作業により、スポーツ・メディシンなる書の初版が1959年に完成した。

又、ソビエトはオゾーリンによって既に1939年に陸上競技の凡ての技術について理論が完成された。彼はよきアスリートでもあり、棒高跳でソビエトにおけるマスターを1928（3.80m）22才、1932.1936（4m195）から1949年（43才）までソビエトの首位を守った。その間の最高記録は1939年34才のときの4.30m（当時日本記録は大仁季雄の4.35m）であった。このように長い年月にわたり理論と実際を実現した競技者であり学者であった氏はめずらしい存在である（1962年東京オリンピック前に招かれて来日貴重な講演を聞かせてくれた）

かくして高い記録は年々と高まっていった。

4）オリンピック・スポーツはスポーツの頂点に立つものである。練習は週のうち一日も無駄に出来る日はない。と言うのはトレーニングの原則は刺激であり、この刺激の効果を如何に高めるか、は刺激による疲労を如何にうまくとるかにかかっている。スピードの強化ではどんな疲労を来すのか、筋力の強化は筋にどの

ような疲労をもたらすか、スピード、力、持久力の強化はこの三者がお互いの練習の疲労を転換させながら効果をあげていくのである。スピードによる神経の疲労は、ただ休みだけではなく、ゆっくり重量を持ち上げる（ゆっくり神経を休ませながら力を使って）ことによって疲労の転換をはかりながら力をつけ、疲れた筋にはゆるい持久運動によって十分な酸素を補給して回復を計る。この繰り返しでトレーニング効果を上げて行くのである。

ソビエトは生化学、生理学、キネジオロギーを駆使して強化をはかる一方幼少よりスポーツ学校によって年齢に応じた練習（技術）トレーニングを行い1950年代からオリンピックで頭角をあらわしはじめると、以後はアメリカを追い金メダル獲得に拍車をかけた。続く東ドイツは、前述のごとくソビエトの教えをもとに着々と出番をねらっていた。そして遂に1964年東京オリンピックの年のIOC会議で次回メキシコ大会から西独と分かれ単独でのオリンピック参加のボートを獲得した。機熟せり、戦後はじまったスポーツ学校の第一陣が1968、メキシコ・オリンピック選手として登場したのである。以後は1988年のソウル・オリンピックまで破竹の進撃を展開させることとなった。

こうした国家ぐるみの活動としてのステート・アマチュアーの内容はカーテンの中で知るよしもなかった。日本選手（コーチ）も数多くソビエトに出掛け、試合を試みたが、ソビエトの一流選手と合同で練習をする機会はなく、その練習内容を伺い見ることは出来なかった。

テレビ放映はじまる

いきなり1988年まで進んだが、再び1960年代に話をもどさなければならない。それは1960年のローマ・オリンピックからまさに革命的なことがスポーツ界にいや世界におきたのだ。それはテレビジョンである。

テレビジョンは1936年ベルリン・オリンピックで放映されたし、第二次世界大戦中アメリカは太平洋戦争の成果をテレビで示し国民に政府への協力を呼びかけていたのである。しかしそれは国内で放映される限られたものであった。

ところがビデオテープの開発によってついに磁気テープは音声の領域を映像の領域に拡大することに成功した。その影響でローマ・オリンピックの映像はビデオテープに録画され空輸によって世界に流された。このテープを自社なりに放映

するには必要な部分だけを抜き出す必要があった。ところがビデオテープの初期の編集は簡単なものではなかった。現在は編集機で映像を見ながら必要な部分を新しいテープに乗せ換えられるが、当時はテープをカットし、うすい金属の接着剤で継ぎ合わせる作業が必要であった。技術もさることながら、時間も手間もたいへんな時代であった。いずれにせよローマの映像は数日おくれで日本（広く世界）の家庭の茶の間に届けられるようになった。

商業化への道

この映像は大きな（今までの概念では及びもつかない）影響を与えることになった。今までオリンピックの映像を見るには映画人がフィルムによって競技を撮影し、編集、吹き込み、完成したものが映画配給会社によって売り出され、しかも観る者は映画館に足を運んでみるのが映画の通例であった。我々が年少の頃見たリーフェンシタールによる民族の祭典、美の祭典と名を売った1936年ベルリン・オリンピックの映像は学校行事として我々の年代の生徒は鑑賞したものであり、続く1948年ロンドン大会の映像（これは関西訛の吹き込みが現地で作られ日本に来たもの）等にしても凡て忘れるほど時間が経過してからのことであった。

しかし今やスポーツの放送は各家庭の受像機にリアルタイムで入ってくる時代である。これを宣伝に使わない手はない。これが商業化へのはじまりである。私の手元に20ページの小冊子がある。前述のオリンピック中間年に行われる地域の大会、それはローマ大会のあと1962年、ヨーロッパ選手権大会の記録の入った雑誌（ドイツの陸上競技専門誌ライヒト・アトレティーク）の中に入っていた宣伝パンフレットである。この冊子（図3参照）の記録の2ページを除くと凡てプーマのスパイクシューズをはいた競技写真である。後述することになるが対抗するアディダスを出し抜いての広告である。これは一例にすぎないが凡ての映像でカメラマンが操作すれば映像上にどのようにも広告出来る（公共放送ではそれが許されない）ことがわかって来て、広告活動でこれほど簡単なものはない。自分で金をかけなくても（否、そのために彼等はIOCと組んで広範囲な広告を行っている）

家庭の映像に自社のマークが見せられることになった。

革命的な映像の変化

ローマに続いて1964年は東京オリンピックである。アメリカによる通信衛星INTELSAT Ⅱ（図４）の打ちあげ（太平洋上空に静止）はオリンピックの映像をリアルタイムで世界に放映出来るようになった。未だ発展途上国では受像機の少ない時代とは言え生の映像が家庭、職場等映像機のおいてある凡ての場所で見ることが出来るようになった。これで商業化（広告業界）には革命的な時代がやって来たのである。後に数字を出すことになるが（表４参照）、未だオリンピック組織委員会を通じてIOCに支払われる金額は少なかったが、オリンピックは金のなる樹に変わったのである。

一方IOC、IFの競技に参加する諸規定は旧来のままアマチュアリズムは選手にとってきびしいものであった。業界の魔の手はのびてもそれは一握りの選手であり大方の選手は真面目な競技態度が守られていた。

魔の触手がのびた1968年

東京オリンピックに次ぐ大きな変化は陸上競技の走路、跳躍場、投擲（やり投）場が人工のウレタン樹脂の走路に変わったことであるその結果生じた驚くべき世界記録の続出を次に示そう。

100メートル　9秒95　ハインズ
200メートル　19秒83　トミースミス（米）
400メートル　43秒86　リー・エバンス（米）
800メートル　1分44秒40　ラルフ・ドーベル（オーストラリア）
（世界タイ記録）
400メートルハードル　48秒12　ダヒット・ヘメリー（英）
走幅跳　8米90　ボブ・ビーモン（半）
三段跳　17米39　ヴィクトル・サネーエフ（ソ）（６位まで世界記録）
4×100m リレー　38秒2　（アメリカチーム）
4×400m リレー　2分56秒1　（アメリカチーム）
女子
100メートル　11秒0　ワイオミヤ・タイアス　（米）
200メートル　22秒5　イレナ・シェビンスカ（ポートランド）

砲丸投　19米61　マルグリッタ・ギュンメル（東独）

過去のオリンピックにこのような沢山の大記録の樹立はみられなかった。新しい走路はまさに魔法の絨毯であった。しかしこれ等の記録を見ると長距離の記録が皆無である。2240米の高地上にあるメキシコは空気中の酸素の％が平地の80％である。そのことによって平地に住む選手と高地に住みついて来た民族との差がこのオリンピックではっきり現れた。中・長距離（800m をのぞく）は凡てアフリカの黒人によって占められてしまった。（この大会の準備の段階から世界各国は中、長距離選手のためのトレーニング場に高地が選ばれるようになり、現在は常識化している。一方、高地民族は記録の向上を目指して、彼の居住する1000m台（ケニアのナイロビは1700m 台）から更に3000m の高地で高地民族が高地トレーニングを行っている現状である。）さらに競技場に現れたのが業者である。選手の用いるスパイクシューズは広告としては最もてっとりばやいエクイプメントであり、価格も選手自身が購入出来る手頃なものであるが、業者は強い選手を狙って決勝競技出場選手を標的に選び、選手村でスパイクに金を捩じ込み翌日の決勝レースに使用してもらい宣伝効果を高めた。オリンピックの期間中にこの行為はエスカレートし、直ぐに話しは広まり、報道関係にも発覚されることになった。こうして選手は前述アゴスチニの暴露記事も上廻る大胆な行為がオリンピックの場で行われてしまった。

この事実は（競技）はI・A・A・F役員の面前で行われたのであるから問題にならないはずはない。その年の冬のI・A・A・Fの会議で早速この問題がとり上げられたという。その席上ときの会長ポーレン（オランダ）は、スパイクの甲皮の色とデザインの色を一色に統一したら（こうなると目で見ても写真をとっても会社のマークははっきりとわからなくなる）と発表があったという。これを聞いた業者はそれでは各国の選手に対する凡ゆる競技用具（衣類、靴等凡て）の提供を止めるとの発言が漏れ聞こえたソビエトは、この提供がなければ我々の選手が履く靴がなくなる。ということでポーレン氏に問題を撤回するようにと申し出たほどだったという。当時すでにスパイクシューズの性能はすぐれていて我々が使用した戦前（新しいシューズをしばらく履き馴らさなければ、又スパイクは取りかえが出来ないので、晴、雨等当日の土質に応じ少なくても2足は準備していた）の時代、戦後の物質不足の頃の粗悪な時代とは比較にならないほ

どに、重量が軽い、最初から足にヒット、従って買って（あるいは与えられて）すぐに利用出来るのが現代のスパイク・シューズの現状である。

これでスパイク問題は立消えとなった。

この事実については1969年3月3日の朝日新聞が、米誌スポーツ・イラストレーテッドの暴露記事としてくわしく伝えている。その中でさきのポーレン氏は「宣伝のためにクツをもらったと言う理由で競技生活を中断しなければならぬような、ばかげたことをするな。」

又AAUのNOC委員会のロビー委員長は、私は何人かの米国陸上選手が西独のスポーツ用品会社から現金を受取ったことを知っているが、これを証拠だてることは恐らくできないだろう。この問題はまだAAUとI・A・A・Fで調査中だ。報道は金額にしても選手の数にしても大げさすぎると思う。受取った最高額は現金小切手で6000マルクとか1500ドルだ。われわれはこの金を受取る条件として、提供した会社の製品を使う約束をしたという証拠をつかめないのだ、と述べている。

前述の“オリンピックは金のなる樹”と化したと述べたが、1965年IOC傘下のNOC（個々の国々のオリンピック委員会）すらオリンピックによる放送権料に目をつけ、ライオンの獲たものをハイエナがねらうごとくの考えが次第に高まって来た。金のほしいのは選手ばかりではないNOCはオリンピックに選手を派遣するための金策を立てなければならないが、さきの価値ある選手への金の提供と、これからオリンピックへ向かう目に見えない成績をあてにして資金の提供に応ずることとは大きな差異があるのだ。

純な気持の応援者

スポーツマンの一部は前述のように心が腐ってしまったが、競技を応援する側はそのような内幕など考えず、又聞いたにしても先のAAUの委員のように、噂話で流してしまう。それどころではない、AAUは元来アメリカのスポーツ統合団体であるが資金は持ち合わせていなかった。従ってオリンピックが近づくと社会に寄付を願って派遣費を調達して来た。その代わりオリンピックが終了し報告書を作成すると、たとえ1$の寄付でも報告書の巻末に氏名を印刷して謝礼として来た。このことはオリンピックにおけるボランティア活動でもそうである。1984年のロサンゼルス・オリンピックのときである。この大会ユベロフなる大物

がオリンピックを商業化しオリンピック組織委員会が独自で金策し、しかも最後には莫大な黒字まで出した、言わば財政面で初の成功例である（1976年モントリオールまでは大きな赤字続きであった）その一つは広告によって施設を作り、大会運営の大部分をボランティアでまかなった。私は報道として現地へ行っていたため、食事も休憩も報道センターでとっていたが、そこで会った一人の老人（ちょっと老人に見えた）は大学の教員であるが報道センターで働いてくれていた。丁度昼どきに合ったので食事を見ると自作のお弁当であった。日本ではこれほどまで徹底したボランティアは見られない。我々陸上競技関係者は東京オリンピック（1964）少し前までは凡て手弁当で審判に当たった。それが時代が進み、経済が大型になって競技会も選手のエントリー・フィーをあげて諸費用をまかなうようになり、交通費の支給がはじまり、ついで日当が払われるようになった。今から完全なボランティアでと言ってもあともどりが出来ない現状である。

さきのロサンゼルスに続いて2000年のシドニーオリンピックでもすばらしいボランティアを見ることが出来た。郊外のスタジアム向かうシドニーの主駅（ターミナル駅）から出るスタジアム行きの列車へ乗客を誘導する駅員の指示をうけてボランティアが働く。列車の先の方へ乗客を誘導、客も手前の空いた席へ乗らないで前の車両から乗り込む。さてかえりの駅の整理である。10万余の客が一つの駅に殆ど集まる。行きは簡単だったが、かえりは大変である。この乗客をどうさばくのか、駅の手前と後方の二ヶ所からホームに誘導するが万余の乗客はボランティアの指示（よくわからないが楽しいことを言っているのだろう）客は楽しげに笑い声を出しながら一時間近く、づるづると人の列にまじって歩く、止まる、歩く、止まるである。しかし全く違和感を感じず列車に乗り込むことが出来た。

大会の途中で噂話が出た。“支給されたボランティアの衣服に価がついた”という。しかしだれも売るという約束の話はでなかったという。

大会が終了、翌朝ホテルのロビーに新聞を取りに行った。最終日の記録を整理するためである。その新聞の中に分厚い数十頁のものが入っている。見ると何とオリンピックを手助けしたボランティアの方々の全氏名を印刷したものだった。純なスポーツの心とはこういうものなのだ。とつくづく感じさせられた。

“みんなスポーツマンなのだ”

ゆらぐアマチュアリズム

メキシコ・オリンピックの靴論争ですっかりアマチュアはその品位を汚し、又これを取締まる役員も手のつけようがない状況を生みだし、アマチュアリズムは有名無害のものの様に見え出した。しかしこれは競技の頂点に立つ一部の競技者にすぎない。底辺の競技者はアマチュアルールを宗教の戒律のように、長い間頑に守りつづけているのだ。最も正しく守られなければならないオリンピックスポーツの中で問題があやふやにされ、国内の競技会では厳しくルールの取締りがなされている。まったく逆の現象である。

そしてこの問題は世界中を流れ各国が何らかの対策を打たなければならない時期がやって来た。

ときに（1969）に日本では総元締の体協がアマチュア委員長に鈴木良徳が就任することになった。氏はブランデージの日本版といえる存在だった。オリンピックの研究にも熱心で沢山の著書があり、財政的にも誰の世話にもならない点でもブランデージに似ていた。（ブランデージ氏はIOC会長在任中どの海外出張も自費、ホテルはスウィートを自弁でとり、IOCの金はびた一文たりとも使わなかった。）

鈴木氏は体協（スポーツ団体の統合国体、当時はNOC（国内オリンピック委員会）も体協内にあった。）本部と加盟競技団体との間にたって苦しい立場にあったが、アマチュアの精神（選手が正しく守るべきこと、殊に金銭上の問題については終始主張を曲げなかった。氏の骨子は近代オリンピックは古代オリンピックの二の舞を踏むなということであった。）

しかしこの年（1969年）大変なことがおきた。前々からくすぶっていたアルペンスキー競技の問題である。1969年5月バルセロナにおけるFIS（国際スキー連盟）の会議でスキーヤーは条件つきで業者から旅費や宣伝費を受けとってもよい。と言うルールの変更にブランデージ氏が激怒したというのだ。当たり前であるアマチュアが業者から金銭をうけとることを許す、これではまさにアマ・プロの混同である。ブランデージ氏の怒りも当然だ、というのが一般の見方であろう。

しかし商業主義にのらなければやっていけないオリンピック。上の方が公然とスポンサーをつけて大事業をやってのける。オリンピックはマスになりすぎたの

である。陸上競技のように10万人収容のスタジアムからは入場料もばかにならない収入である。ところがマイナーな競技では殆どが（—）である。これをまかなうためにどうしても業者への依存が必要になってしまったのだ。もう引っ込みはきかなくなった。そして1972年が明けた。

サッポロ・オリンピック

大会を前にして1月15日付 UP 伝を日本経済新聞は17日次のように伝えている。ブランデージ氏は「私はルールを押しつけるような権威は持っていない。札幌冬季オリンピックのスキー競技を世界選手権に切り替える事も IOC 理事会で却下されるだろう（会議は1月28日）と資格問題について、初めて本音にふれた発言をした。

又「大会前の理事会は二つの問題について結論をくだすことにろう」と述べて FIS が商業主義排除（そんなことはありえないが）に努めているので、すべて忘れて新しくスタートをする、というものだ。もう一つの可能性は一流選手が全部無資格とすればオリンピックの表彰式やメダルの授与をやめて別の大会にした方がよいと。

これほどにブランデージを追いつめた事件はオリンピックの参加資格にある「選手は広告の目的でスポーツ用品業者などに写真や名前記録を使わせてはならない」の項でスキー選手の滑走中に観衆には何が見えるのか。そのスピードと転倒なしで速いスピードで落下（あえていえば）する姿のみぞある。そしてゴール、ホッとした選手がスキーをぬいでその裏面を見せ観衆にほほえむと、スキー板のトップベンドに業者のマーク。商品名がくっきりとうつされる。金をとったお礼にこんなことまでしてみせる。ブランデージは腸が煮えくりかえる思いを何度も感じとったのだろう。

そしてサッポロ・オリンピックを前にして遂にカール・シュランツをオーストリアに帰国させてしまった。40人以上いるというくさい選手の中から何故カール・シュランツを選んだのか。なかなか疑問が多い。帰国したシュランツはまさに英雄の凱旋であった。アマチュアー問題の中でのプロ育成、これでアマ問題は爆発をおこしてしまった。ブランデージ氏は前述の通りジム・ソープと1912年五種競技を戦ったアスリートであった。しかしかたくなにアマ問題にこだわりすぎ、

現場をはなれすぎ、時代の流れを掴みきれなかったのだろうか。世論は氏にあまり味方しなかった。

1972年ミュンヘン・オリンピック

この大会はブランデージ氏の最後のオリンピックとなった。この大会は中途でアラブゲリラによるイスラエル選手団への侵入事件で沢山の犠牲者を出した不祥事があった。

さて競技ではアメリカがベトナム戦争の影響で競技力が低下する中でソビエトを中心とする東欧諸国は益々力をつけてアメリカを脅かすかの状況となった。特に開催国ドイツは東独が袂を分けてから二度目のオリンピックである。陸上競技におけるその結果を記録で見ると、

1972ミュンヘン・オリンピック

100m	10.07①ワレリーボルゾフ（USR）			
	10.23④コルネリューク（USR）			
200m	20.00①	ボルゾフ（USR）	20.56	⑥シエンク（DDR）
			20.65	⑦イエリングハウス（DEU）
			21.05	⑧ゼンク（DDR）
400m			45.31	⑤シユレスケ（DEU）
			45.68	⑦ホンツ（DEU）
800m	1:45.9②アルザノフ（1位と同タイム）（URS)			
			1:46.5	④ケンパー（DEU）
			1:48.0	⑧フロム（DDR）
1500m	3:40.2 ⑧パンテライ（URS）		3:40.1	⑦ヴェルマン（DEU）
5000m	13:39.4 ⑧スビリドフ（URS）		13:32.6	⑥ノルポト（DEU）
ハードル				
110m H			13.71	⑤ジーベック（DEU）
400m H	50.25 ⑧ゾリン（URS）		49.65	⑤シューベルト（DEU）
スティーブル・4コース				
3000m	H8:34.6 ⑦ビッテ（URS）			

競歩

20km W1°:	26:55.2	②ゴルブニッチ（URS）	1°:	26:42.4	①フランケル（DDR）
1°:	28:16.6	⑤スマガ（URS）	1°:	27:16.6	③ライマン（DDR）
			1°:	27:55.0	④フスペルリンダ（DDR）
50km W3°:	58:24.0	②ソルダテンコ（URS）	3°:	56:11.6	①カネンベルグ（DEU）
4°:	01:35.4	④バルチュ（URS）	4°:	04:05.4	⑤ザルツアー（DDR）
			4°:	00:26.0	⑥ヴァイドナー（DEU）
ＨＪ走高跳	2.23m	①タルマッチ（URS）	2.21m		②ユンゲ（DDR）
	2.15m	⑧アクメトフ（URS）	2.18m		④マゲール（DEU）
ＰＶ棒高跳	5.50m		5.50m		①ノルドビッヒ（DDR）
			5.30m		④クレッツキー（DEU）
			5.20m		⑥オール（DEU）
ＬＪ走巾跳	7.75m	⑧バルユウキー（URS）	8.18m		②ビウムガルトナー（DEU）
			7.98m		⑥クラウス（DDR）
ＴＪ三段跳	17.35m	①サネーエフ（URS）	17.31m		②ドレーメル（DDR）
ＳＰ砲丸投			21.14m		③ブリーゼンク（DDR）
			21.14m		④ギース（DDR）
			20.37m		⑦ビルレンバッハ（DEU）
ＤＴ円盤投			62.42m		⑥トーリュ（DDR）
HTハンマー投	75.50m	①ボンダルチュク（URS）	74.96m		②ザハゼ（DDR）
	74.04m	③クメレフスキー（URS）	71.52m		④バイヤー（DEU）
			71.14m		⑦クライン（DEU）
やり投	90.46m	②ルシス（URS）	90.48m		①ボルファーマン（DEU）
デカスロン	8454p	①アビロフ（URS）	7950p		⑤シュレーヤー（DDR）
	8035p	②リトビネンコ（URS）			
4×100リレー	38.50	②　（URS）	38.79	③	（DEU）
			38.90	⑤	（DDR）
			3:00.9	④	（DEU）

女子

100m	11.07	①ステッフェル（DDR）
	11.35	⑤リヒター（DEU）

		WR			
200m	22.40	①スッテフェル（DDR）			
	22.75	④ストロバール（DDR）			
	22.89	⑤クロニーガー（DEU）			
	22.89	⑤ハイニッヒ　（DDR）			
400m	51.08	①ツアールト　（DDR）			
	51.21	②ヴァイルデン（DEU）			
	51.86	④サイドラー　（DDR）			
	52.19	⑦ケスリング　（DDR）			
800m	1:58.6	①ファルク　（DEU）	1:58.7	②	サバイテ　（URS）
	1:59.2	③ホフマイスター（DDR）			
1500m			WR		
	4:02.8	②ホフマイスター（DDR）	4:01.4	①ブラギナ（URS）	
	4:04.1	④ブルネライト　（DDR）	4:06.5	⑦パンゲロワ（URS）	
100mハードル					
	12.59	①エアファルト（DEU）			
	12.90	③バルツアー　（DDR）			
	13.27	⑦クルンホルフ（DDR）			
ＨＪ走高跳	1.92m	①マイファルト（DEU）			
	1.85m	⑤シュミット（DDR）			
	1.85m	⑦ビッツアハス（DDR）			
ＬＪ走巾跳	6.78m	①ローゼンダール（DEU）			
	6.51m	①シェーラー（DEU）			
	6.46m	①オルフェルト（DDR）			
ＳＰ砲丸投	22.22m	②ギュンメル（DDR）	21.03m	①チゾワ（URS）	
	18.94m	⑤アダム（DDR）	19.24m	④ドルシェンコ（URS）	
	18.85m	⑥ランゲ（DDR）			
ＤＴ円盤投	67.18m	⑤ベスターマン（DEU）	66.62m	①メルニク（URS）	
	61.72m	⑤ヒンツマン（DEU）	62.86m	④ダニロワ（URS）	

やり投	63.88m	⑧フュックス（DDR）		
	62.54m	⑤トッドテン（DDR）	56.36m	④コロルジュワ（URS）
五種競技	4791	②ローゼンダール（DEU）	4597	⑤テイコミロワ（URS）
	4768	③ボーラック（DDR）		
	4671	④ボドナー（DDR）		
	4449	⑦マック（DEU）		
4×100リレー	42.80	①（DEU）	42.81	（URS）
	42.95	②（DDR）	43.59	（URS）

1968メキシコオリンピック東西ドイツ・ソビエトの記録

男子

200m	22.6	⑧アイゲンヘル（DEU）		
400m	45.3	⑤イエーリングハウス（DEU）		
800m	1:45.8	④アダムス（DEU）		
	1:46.2	⑥フロム（DDR）		
1500m	3:39.0	③ツムラー（DEU）		
	3:42.5	④ノルポト（DEU）		
10000m			29:43.2	⑤スビリドフ（URS）
20km W	1°:35:27.2	⑤スペルリング（DDR）	1°:33:58.4	⑤ゴルブニュティ（URS）
	1°:36:31.4	⑦ライマン（DDR）		
50km W	4°:20:13.6	①ホーン（DDR）		
	4°:33:09.8	④ゼルッアー（DDR）		
110H	13.6	⑤トゥルッミール（DEU）		
400H	49.0	②ヘンニーゲ（DEU）	49.1	⑤スコモロフフ（URS）
	49.2	⑦シューベルト（DEU）		
4×100リレー	38.6	⑤（DDR）		
	38.7	⑥（DEU）		
4×400リレー	3:00.5	③（DEU）		
HJ走高跳	2.14	⑦スピールフォーゲル（DEU）	2.20	⑨ガブリロフ（URS）
			2.16	④スクボルツオフ（URS）

棒高跳	5.40	②シプロウスキー（DEU）		
	5.40	③ノルドビッヒ（DDR）		
	5.20	⑧エンゲル（DEU）	5.30	⑥ブリツネッオフ（URS）
走巾跳	8.19	②ベア（DDR）	8.12	④テルオビネシアン（URS）
三段跳			WR 17.39	①サネーエフ（URS）

記録の中で（URS）はソビエト、（DDR）は東ドイツ、（DEU）西ドイツを示す。WRは世界記録を示す。

この二つのオリンピック大会の記録を見ると、メキシコに於けるソビエトのスピリドフの5000m又ミュンヘンの10000mにおける以外に長距離の記録が見当たらない。東ドイツとソビエトの両記録を見ると特に跳躍と投擲にすぐれた成績をあげている。東ドイツもほぼ同様である。しかも東ドイツの成績はメキシコよりはるかに高い水準を示していることである。前文でも述べておいた通りこれは偶然ではなく、スポーツ学校の組織的な強化の成果が出はじめたのである。ところが私はミュンヘンのサブトラックに入って練習を見ているとき極めて異様な光景に出合った。身体のガッシリした女性が私にむかって笑顔で駆けよって来た。彼女は私にむかって“ヨルゴワ（ブルガリア）です”と言ってたちどまった。よく顔を見るとまさしくヨルゴワであるがあまりの変わりようにびっくりした。言葉はブルガリア語でわからないが、私への挨拶はなつかしさと、東京での思い出の様子であることは察しがつく。

彼女は1963年プレオリンピックで初めて日本にやって来た、まだ少女であった。到着するなり出た問題は荷物が行方不明で運動具が何一つないとのこと。早速、日大の前田先生と共に西スポーツに泣き込んで運動具一式を調達してもらい早速練習がはじまったような有様であった。その時の彼女の身体は痩せていてあまり大きくは見えなかったがミュンヘンでの彼女は張ち切れんばかりに肉付きのよい、たくましい身体になり、したがって背丈も大きく見えるように感じられた。オリンピックの結果は走幅跳6m77で2位優勝したローゼンダール（西ドイツ）との差は何と1㎝であった。又時は流れて5年、1977年日本学生陸上競技連合がソフィアのユニバーシアードへ応援旁々研修旅行を計画、私も北沢清団長のお伴で同行することになった。ブルガリアについた我々は切符の購入やプログラムの入

手に苦労しながら見学、応援をしたわけだが、或る日ヨルゴワが日本人に会いに来たいという情報が入った。現れた彼女を見た私は再びおどろいた。

ガリガリにやせた身体で子供を二人つれて現れたのである。東京、ミュンヘン、ソフィア、会う度に異状な体型の変化に、これは薬物の成せるわざだなと直感した。噂にのぼった筋肉増強剤は前々から話題にのぼっていたが、目の前に現れた現実は何よりの証拠だと感じた。

現金授受の問題でメキシコ大会を中心に種々述べて来たが現場を見ていない協会役員の発言は“調査を進めている”とか何の証拠もつかめないと言った逃げ口上ばかりである。

アマチュア問題から薬物使用、これらは競技会に参加する条件として、ドーピングは昔から固く禁じられている。近代オリンピックがはじまってたったの70年間で競技者を惑わす悪事は凡て出そろってしまったが、殆ど噂でにごされて来た。

1988年ソウル・オリンピック

1972年のミュンヘンが終わり1976年モントリオールは人種差別問題でアフリカが撤退、続く1980年1984年の両オリンピックは米、ソにおける主催であったが、前者モスクワは1979年のソビエトによるアフガニスタン侵入に反対する動きから西側諸国の不参加。ロサンゼルスへは東側の不参加でオリンピックは少々魅力を失ったかに見えた。1988年この二つの難事を経験したIOCはこの間キラニン会長が1972年からそして1980年にはサラマンチに変わって会長をつとめることになった。この間の変化はIOCの規約の改正であり、近代化に向けたIOCの規約からアマチュアなる文字が消えてしまったことである。これはいったいどうなることなのか。オリンピックはプロでもよい、世界最高の大会を世界の人々に見せることだという。ところが内実はアマチュアについては各NOC、又IFに下駄をあずけてしまっている。さて競技の面を見るとソウル・オリンピックの米国代表の選考会に驚異的な記録がとび出した。7月16日インディアナポリスでの選考会でF・グリフス・ジョイナーが10秒49で100mを走り抜いたのである。200mを得意とする彼女の成績は'84ロサンゼルス・オリンピック、'87ローマ世界選手権共に2位に甘んじた。ところがたった一冬のトレーニングは未曽有の記録で彼女の人気、地位を一変してしまった。そしてソウル・オリンピックでも噂にたがわず

100米、200米を10秒54、21秒34（世界記録）で走り観衆を喜ばせ、驚かせたばかりか世界の目を彼女に向けさせた。

ところが男子の100米でも異変がおきた。前年の'87年ローマで100米（ベン・ジョンソン）に完敗したカール・ルイス（米）が巻き返し優勝するか？と予想を立てた人もあったが、実際にはローマより圧倒的な差で、軽く負けてしまった。そのはずであるタイムはおどろくなかれ9秒79まさに世紀の記録が実現したが、不運にもオリンピック期間中に薬物反応があらわれ失格となった。オリンピック初の大事件である。ローマ以来彼の身体を見た人は並の身体ではないと感じ取れたに相違ない。東京オリンピックのヘイズを更に上回る筋肉隆々たる身体である。私は彼のスタートの方法をローマの世界選手権の際に4×100米リレーの第一走者となった彼のスタートを真横から見たのであるが、実にうまいスタートだと感じた。それは用意の姿勢で身体を支える両腕が垂直よりやや後ろ傾いており、出発の合図で上体が脚の蹴りと同時に全身が前のめりに作動出来るのである。しかしそれにも増して彼の加速はすばらしかった。失意の彼は後日、結局自ら薬物の使用を認めた。そして果たせるかな解禁後の彼のスピードは日本の一流（超一流ではない）ランナーが走る10秒4台程度の記録にとどまった。

薬物使用はそれを使用していない競技者に対して極めて公正を欠いた不埒な態度である。即ち同じ条件で競技をしていないわけである。更に問題なのはそれだけではない薬物の使用はその本人の身体に生涯の問題を与えかねない危険があるからである。1984年東独のウベ・ホーンはやり投で104米80の大記録を樹立した。７月20日東ベルリンでのことである。

この記録が競技場内の（現在の）フィールドの広さではあぶなくなるのと同時に旧来のやりの接地の確認（やりが地面にささらない場合）の位置がむずかしくなり、I・A・A・Fはルールの改正に踏み切った。そしてその本人が競技を止め、普通の生活に入った後はまるで廃人になったように老け込んでしまったと言う。

ステロイド系のホルモンは体内で適宜生産され人間の身体のコントロールに役立っているわけであるが、余分に与えれば一時的に持てる生命力を抽出させ、自ずからの生命を老けこませることになる。

前出のカール・ディームの言葉をかりれば氏はスポーツ十戒の中で、トレーニングにおいても、試合においても、けっして中途でなげるな。しかし如何なるス

ポーツも、たとえ一時間でも、身体をこわしてまでやる価値はないのだ。

と述べている。ましてや薬物の利用で身体を蝕ばせることなど愚の骨頂と言わなければならない。しかしそれでも、如何なる警告をも無視して選手は薬物の使用に踏み切るのであろうか。それは薬物を使って身体を鍛え、記録を高めて金銭に結びつけようとするのである。業を煮やした米国は最近極めて厳重なる警告を発し薬の防止にのり出した。しかし使う側と、これを幇助する医師は如何に薬の検出からのがれられるかに血道をあげている。IOCは更に精密な計器でこれを発見しようとする。まさにいたちごっこである。1989年のベルリンの壁崩壊、東西ドイツの統一これによって東独で行われて来た薬物使用のマニュアルが凡て明るみに出て、逆に世界に拡がったといえよう。

記録と金

それでも選手は薬物を使って記録を高めようとするのか。それは記録は金のなる樹なのである。その道すじは、まずオリンピックは世界最高の競技会である。しかしIOCは競技会のナンバーカードに決してスポンサーを付けない。競技場を広告の場としない。競技場、選手、競技は純なものでなければならないのだと、IOCが組織委員会から受取るTVマネー金額は大きいが、IOCはこれを傘下の各IFに分けて世界のスポーツの振興に当ててもらいたいというものだ。だからオリンピックは清いものでなければならないという理論なのだ。ところが、それだけに観衆も又オリンピックを価値高いものとして見てくれる。さて選手はどうか。オリンピックは金に目がくらんだ選手にとっても一文にもならない大会である。

ところがこの成績（金、銀、銅メダルの獲得）がその後の招待競技のギャランティの値上げに繋がるという仕組みなのである。その点世界選手権が選手にとって不評になっている。それは世界選手権での賞金が小さいからである。昔の考えで言えば道義も地に落ちたものだ、ということになる。だがもう一度ルールを考えてみよう。欧米ではブロークンタイム・ペイメントはない。従って会社務めをして余暇にスポーツを楽しむ程度のことには一向にさしつかえないが、会社を休んで練習、試合に遠征しても会社やスポーツ協会は一文の負担もしてくれない。それではスポーツをやっていられない、仕方なくスポーツを行い、記録に応じて代償を得ているのである。結局記録だけが頼りの世界なのである。

そこで再び書くことになるが日本の選手はめぐまれていると言うのである。遠征して会社を空けても給金を払ってくれる。これが伝統的に続いている企業が多いと言える。

プロとアマ

今までオリンピックの開始から今日まで様々な事例を述べて来たが、プロとアマとの概念はなかなかつかみどころがない。アマ規定がうるさかった戦後の時代にはアマとはなにかと言うより、プロの範疇を決めれば、それに抵触しない範囲のことを言うことで一つの解決策となるかと考えた人もあった。しかしプロと言ってもその範疇そのものが広すぎる。否それではアマは他人まかせだと言うことになる。結局アマの原点にもどり愛、即ち好きだからスポーツをする、それにつきるのであろう。好きでスポーツするからこそ目標（記録、技術の獲得）にむかって誰にも負けない、他人に出来ないような試練に耐えうるものなのだ。したがってアマチュアは永遠なのだと言える。（生活の糧としてスポーツをすればそれは記録の出せる年齢の限界でそのスポーツは終焉を迎えてしまうが、心で自からを磨くスポーツだからこそ永遠でありうるのだ。）

参　考　文　献

○日本体育協会史　日本
○日本陸上競技史　日本陸競技連盟
○ World Records International Athletic Foundation　1864－1964
○ A·World History of Track & Field Athlelics Unford University Press 1964
○ The Complete Book of The Olympics David Wauechinsky
○ A·T·F·S Olymic Handbook an Athletis arena Sfatistical Publication
○スポーツ大辞典　大修館
○20世紀全記録　講談社
○ Programa oficial OCT.73－20 Juegos De la XIX Olympiada MEXICO68
○ Europa-Meisterschaft 1962　PUMA
○ Association of Track and Field Statiaticians（A·T·F·S·）1930　Milan Sykora

○大阪朝日新聞、○大阪毎日新聞、○読売新聞
○ AP ○ UP
○オリンピックのすべて　報知新聞社
○オリンピックの知識　野口源三郎
○ Evolution of Track and Field Performances Throughout the World
（1924－1960）
compiled by LUIGI MENGONI

丸山

	プロフェッショナル		アマチュア		1896(OLY)	1912(OLY)	2002.WR
100					12.0	10.8	9.78
100y	9".3/5 '85	'95(1864)					
200		(1845)	21.4/5	'96		21.7	19.32
400							
440y	48.1/4	'73(1865)	48.1/2	'95	54.2	48.2	43.18
800			2:05.0	'57	2:11.0	1:51.9	1:41.11
880y	1:55.3/4	'67(1867)	1:53.2/5	'85			
1,500					4:33.2	3:56.8	3:26.0
M							
1,609.36	4:12.3/4	'86	4:15.3/5	'95(1792)④			
2,000	5:30.0	'62	5:38.4/5	'85			
3,000			9:22.2/5	'95			
2M							
3,218.72	9:11.1/2	'63	9:33.3/5	'81(1477)②			
3M							
4,828.04	14:19.1/4	'88					
5,000			14:24.0	'93		14:36.0	12:39.36
6M							
9,656.07	29:50.0	'63	30:17.4/25	'92			
10,000	31:35.0	'85	31:40.0	'84		31:20.8	26:22.75
10M							
16,093,60	51:06.3/5	'85	51:20.0	'84(1788)③			
1HOUR	18,589m	'63(1863)	18.555	'84(1740)①			
15M							
24,140.40	1°:22:00.0	'52(1852)	1:22:15.2/5	'92			
25,000	1°:28:06.0	'52	1:27:22.0	'84			
30,000	1°:49:15.0	'86	1:44:33.0	'94			
			(20Mileの途中計時)				
マラソン			1.95.5	'95	2°:58:50	2°:36:55	
走高跳	1.70	'52(1860)	1.72.5	'66	1.81	1.93	2.45
棒高跳	3.15	'49(1869)	3.58	'91	3.30	3.95	6.14
走幅跳	6.20	'39(1834)	7.175	'93	6.35	7.60	8.96
三段跳	14.96	'73(1866)	14.78	'93	13.71	14.76	18.29
砲丸投	12.55	'42(1839)	12.93	'72	11.22	15.34	23.12
円盤投		(1882)	27.81	'96	29.15	45.21	74.08
110M			(GRE)		17.5	15.1	12.91

△'00の二ケタの数字は西暦1800年代の下二ケタを示す
△(　　)で結んだ年代は、その種目がはじめて行われた西暦の年号を示す

表1

近代オリンピックでのアマチュアリズムとプロ行為

	100 Metres	200 Metres	400 Metres	800 Metres	1500 Metres	5000 Metres	10000 Metres	Marathon	3000 Metres Steeplechase	110 Metres Hurdles	400 Metres Hurdles	High Jump	Pole Vault	Long Jump	Triple Jump	Shot Put	Discus Throw	Hammer Throw	Javelin Throw	Decathlon	20 Kilometres Walk	50 Kilometres Walk	4x100 Metres Relay	4x400 Metres Relay
1896	12.0		54.2	2:11.0	4:33.2			2:58:50		17.6		1.81	3.30	6.35	13.71	11.22	29.15							
1900	11.0	22.2	49.4	2:01.2	4:06.2			2:59:45	7:34.4	15.4	57.6	1.90	3.30	7.18	14.47	14.10	36.04	49.73						
1904	11.0	21.6	49.2	1:56.0	4:05.4			3:28:53	7:39.6	16.0	53.0	1.80	3.50	7.34	14.35	14.81	39.28	51.23						
1906	11.2		53.2	2:01.5	4:12.0	15:20.0	26:11.8	2:51:24		16.2		1.775	3.50	7.20	14.07	12.32	41.46		53.90					
1908	10.8	22.6	50.0	1:52.8	4:03.4	14:39.6	25:11.2	2:55:19	10:47.8	15.0	55.0	1.90	3.71	7.48	14.91	14.21	40.89	54.74	54.82	James Thorpe (USA)				3:29.4
1912	10.8	21.7	48.2	1:51.9	3:56.8	14:36.6	31:20.8	2:36:55		15.1		1.93	3.95	7.60	14.76	15.34	45.21	54.74	60.64	7724 (8412)(x)			42.4	3:16.6
1920	10.8	22.0	49.6	1:53.4	4:01.8	14:55.6	31:45.8	2:32:36	10:00.4	14.8	54.0	1.935	4.09	7.15	14.50	14.81	44.68	52.87	65.78	6804			42.2	3:22.2
1924	10.6	21.6	47.6	1:52.4	3:53.6	14:31.2	30:23.2	2:41:23	9:33.6	15.0	52.6	1.98	3.95	7.44	15.52	14.99	46.15	53.29	62.96	7710			41.0	3:16.0
1928	10.8	21.8	47.8	1:51.8	3:53.2	14:38.0	30:18.8	2:32:57	9:21.70	14.8	53.4	1.94	4.20	7.73	15.21	15.87	47.32	51.39	66.60	8053			41.0	3:14.2
1932	10.38	21.12	46.28	1:49.70	3:51.20	14:29.91	30:11.42	2:31:36	10:33.4	14.56	51.67	1.97	4.31	7.64	15.72	16.00	49.49	53.92	72.71	8462		4:50:10	40.10	3:08.14
1936	10.3	20.7	46.66	1:52.9	3:47.8	14:22.2	30:15.4	2:29:20	9:03.8	14.2	52.4	2.03	4.35	8.06	16.00	16.20	50.48	56.49	71.84	7900		4:30:42	39.8	3:09.0
1948	10.3	21.1	46.2	1:49.2	3:49.8	14:17.6	29:59.6	2:34:52	9:04.6	13.9	51.1	1.98	4.30	7.82	15.40	17.12	52.78	56.07	69.77	7139		4:41:52	40.6	3:10.4
1952	10.79	20.81	46.09	1:49.34	3:45.28	14:06.72	29:17.0	2:23:04	8:45.68	13.91	51.06	2.04	4.55	7.57	16.22	17.41	55.03	60.34	73.78	7887		4:28:08	40.26	3:04.04
1956	10.62	20.75	46.85	1:47.75	3:41.49	13:39.86	28:45.59	2:25:00	8:41.35	13.70	50.29	2.12	4.56	7.83	16.35	18.57	56.36	63.19	85.71	7937	1:31:28	4:30:43	39.60	3:04.81
1960	10.32	20.62	45.07	1:46.48	3:35.6	13:43.76	28:32.18	2:15:17	8:34.30	13.98	49.51	2.16	4.70	8.12	16.81	19.68	59.18	67.10	84.64	8392	1:34:08	4:25:30	39.66	3:02.37
1964	10.06	20.36	45.15	1:45.1	3:38.1	13:48.8	28:24.4	2:12:12	8:30.8	13.67	49.6	2.18	5.10	8.07	16.85	20.33	61.00	69.74	82.66	7887	1:29:34	4:11:13	39.06	3:00.7
1968	9.95	19.83	43.86	1:44.40	3:34.91	14:05.01	29:27.40	2:20:27	8:51.02	13.33	48.12	2.24	5.40	8.90	17.39	20.54	64.78	73.36	90.10	8193	1:33:59	4:20:14	38.24	2:56.16
1972	10.14	20.00	44.66	1:45.86	3:36.33	13:26.42	27:38.35	2:12:20	8:23.64	13.24	47.82	2.23	5.50	8.24	17.35	21.18	64.40	75.50	90.48	8454	1:26:43	3:56:12	38.19	2:59.83
1976	10.06	20.23	44.26	1:43.50	3:39.17	13:24.76	27:40.38	2:09:55	8:08.02	13.30	47.64	2.25	5.50	8.35	17.29	21.05	67.50	77.52	94.58	8618	1:24:41		38.33	2:58.65
1980	10.25	20.19	44.60	1:45.40	3:38.40	13:20.91	27:42.69	2:11:03	8:09.70	13.39	48.70	2.36	5.78	8.54	17.35	21.35	66.64	81.80	91.20	8495	1:23:36	3:49:24	38.26	3:01.08
1984	9.99	19.80	44.27	1:43.00	3:32.53	13:05.59	27:47.54	2:09:21	8:11.80	13.20	47.75	2.35	5.75	8.54	17.26w	21.26	66.60	78.08	86.76	8798	1:23.13	3:47:26	37.83	2:57.91
1988	9.92	19.75	43.87	1:43.45	3:35.96	13:11.70	27:21.46	2:10:32	8:05.51	12.98	47.19	2.38	5.90	8.72	17.61	22.47	68.82	84.80	84.28	8488	1:19:57	3:38:29	38.19	2:56.16
1992	9.96	20.01	43.50	1:43.66	3:40.12	13:12.31	27:46.70	2:13:23	8:08.86	13.12	46.78	2.34	5.90	8.67 A	18.17w (8.43)	21.70	65.12	82.54	89.66	8611	1:21:45	3:50:13	37.40 WR	2:55.74
1996	9.84	19.32	43.49	1:42.58	3:35.78	13:07.96	27:07.94	2:12:36	8:07.12	12.95	47.54	2.39	5.92	8.50	18.09	21.62	69.40	81.24	88.16	8824	1:20:07	3:43:30	37.69	2:55.99
2000	9.87	20.09	43.84	1:45.08	3:32.07	13:35.09	27:18.20	2:10:11	8:21.43	13.00	47.50	2.35	5.90	8.55	17.71	21.29	69.30	80.02	90.17	8441	1:18:59	3:42:22	37.61	2:56.35
J.Thorpe	11.2		52.2		4:40.1					15.6		1.87	3.25	6.79		12.89	36.98		45.70	8412(6564 - (1985 Tables)				

WOMEN (From 1928)

	100 Metres	200 Metres	400 Metres	800 Metres	1500 Metres	3000 Metres (1928 to 1986: 800)	5000 Metres	80/100 Metres Hurdles (100 Metres from 1972)	High Jump	Long Jump	Shot Put	Discus Throw	Javelin Throw	Pentathlon	4x100 Metres Relay	4x400 Metres Relay
1928	12.2			2:16.8				1.59				39.62			48.4	
1932	11.9							1.65				40.58	43.68		46.86	
1936	11.5							1.60				47.63	45.18		46.9	
1948	11.9	24.4						1.68		5.69	13.75	41.92	45.57		47.5	
1952	11.65w	23.89						1.67		6.24	15.28	51.42	50.47		46.14	
1956	11.82	23.55						1.76		6.35	16.59	53.69	53.86		44.65	
1960	11.18w	24.13		2:04.50				1.85		6.37	17.32	55.10	55.98		44.72	
1964	11.49	23.05	52.01	2:01.1				1.90		6.76	18.14	57.27	60.54	5246	43.69	
1968	11.08	22.58	52.03	2:00.92				1.82		6.82	19.61	58.28	60.36	5098	42.88	
1972	11.07	22.40	51.08	1:58.55	4:01.38			1.92		6.78	21.03	66.62	63.88	4801	42.81	3:22.95
1976	11.08	22.37	49.28	1:54.94	4:05.48			1.93		6.72	21.16	69.00	65.94	4745	42.55	3:19.23
1980	11.06	22.03	48.88	1:53.43	3:56.56			1.97		7.06	22.41	69.96	68.40	5083	41.60	3:20.12
1984	10.97	21.81	48.83	1:57.60	4:03.25	8:35.96		2.02		6.96	20.48	65.36	69.56	5390	41.65	3:18.29
1988	10.54w	21.34	48.65	1:56.10	3:53.96	8:26.53	31:05.21	2:25:40		7.40	22.24	72.30	74.68	7291	41.98	3:15.18
1992	10.82	21.81	48.83	1:55.54	3:55.30	8:46.64	31:44.82	2:30:41		7.14	21.06	70.04	68.36	7044	42.11	3:20.32
1996	10.94	22.12	48.25	1:57.73	4:00.83	14:39.88	31:01.03	2:26:05		7.12	20.56	69.66	67.94	6780	41.95	3:20.91
2000	10.75	21.84	49.11	1:56.15	4:05.10	14:40.79	30:17.49	2:25:14		6.99	20.56	68.40	68.91	6584	41.95	3:22.6

表 2

Athlètes en course. Fragment d'une amphore grecque.
Athletes in a foot race. Fragment of a Greek amphora.
Atletas corriendo. Fragmento de una ánfora griega.

図 1

100 mètres, Racing-Club de Paris.
100 mètres race at the Paris Racing Club.
Carrera de 100 metros, Racing-Club, Paris.

図 2　パリーレーシングクラス

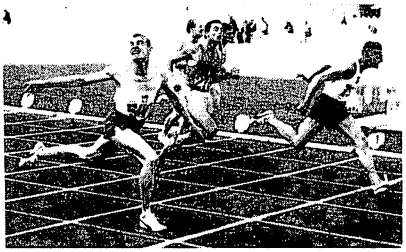

図 3

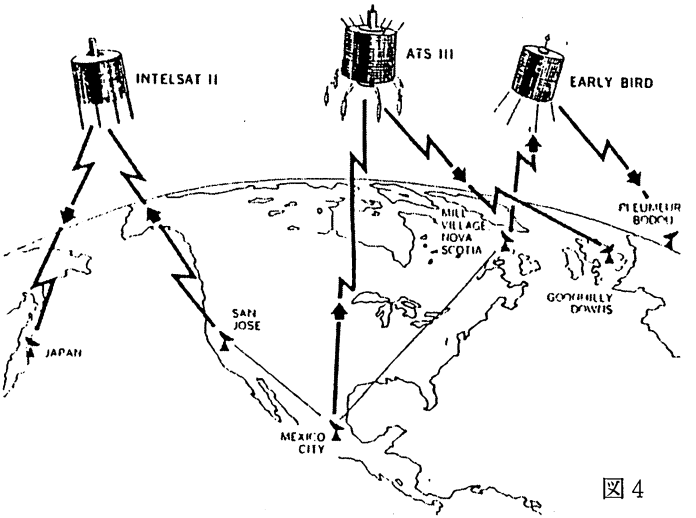

図 4

オリンピック大会放送権料の推移
（単位：万ドル、大会協力費を含む）

表 4

	日本	米国	EBU
【夏季大会】			
1960年	5	60	60
ローマ	NHK	CBS	
1964年	50	100	38
東京	NHK	NBC	
1968年	60	850	100
メキシコ	NHK	ABC	
1972年	105	1350	170
ミュンヘン	NHK	ABC	
1976年	130	2500	455
モントリオール	プール	ABC	
1980年	850	8500	595
モスクワ	朝日	NBC	
1984年	1850	22500	1980
ロサンゼルス	プール	ABC	
1988年	5000	30000	2800
ソウル	プール	NBC	
1992年	5750	40100	9000
バルセロナ	プール	NBC	
（注）プールはNHKと民放連による「ジャパンプール方式」、朝日はテレビ朝日、EBUはヨーロッパ放送連合。			
【冬季大会】			
1968年	10	300	35
グルノーブル	NHK	ABC	
1972年	53	440	133.4
札幌	NHK	NBC	
1976年	17.8	1450	70
インスブルック	NHK	ABC	
1980年	105	1550	400
レークプラシッド	NHK	ABC	
1984年	250	9150	412
サラエボ	NHK	ABC	
1988年	390	30900	570
カルガリー	NHK	ABC	
1992年	900	24300	1850
アルベールビル	NHK	CBS	
1994年	1270	30000	2400
リレハメル	NHK	CBS	

1500 Metres

1920	Albert Hill	GBR	4:01.8	Philip Baker	GBR	4:02.4	Lawrence Shields	USA	4:03.1
1924	Paavo Nurmi	FIN	3:53.6	Willy Schärer	SUI	3:55.0	Henry Stallard	GBR	3:55.6
1928	Harri Larva	FIN	3:53.2	Jules Ladoumègue	FRA	3:53.8	Eino Purje	FIN	3:56.4

5000 Metres

1912	Hannes Kolehmainen	FIN	14:36.6	Jean Bouin	FRA	14:36.7	George Hutson	GBR	15:07.6
1920	Joseph Guillemot	FRA	14:55.6	Paavo Nurmi	FIN	15:00.0	Erik Backman	SWE	15:13.0
1924	Paavo Nurmi	FIN	14:31.2	Ville Ritola	FIN	14:31.4	Edvin Wide	SWE	15:01.8
1928	Ville Ritola	FIN	14:38.0	Paavo Nurmi	FIN	14:40.0	Edvin Wide	SWE	14:41.2
1932	Lauri Lehtinen	FIN	14:29.91	Ralph Hill	USA	14:30.0	Lauri Virtanen	FIN	14:44.0
1936	Gunnar Höckert	FIN	14:22.2	Lauri Lehtinen	FIN	14:25.8	Henry Jonsson	SWE	14:29.0

10000 Metres

1912	Hannes Kolehmainen	FIN	31:20.8	Louis Tewanima	USA	32:06.6	Albin Stenroos	FIN	32:21.8
1920	Paavo Nurmi	FIN	31:45.8	Joseph Guillemot	FRA	31:47.2	James Wilson	GBR	31:50.8
1924	Ville Ritola	FIN	30:23.2	Edvin Wide	SWE	30:55.2	Eero Berg	FIN	31:43.0
1928	Paavo Nurmi	FIN	30:18.8	Ville Ritola	FIN	30:19.4	Edvin Wide	SWE	31:00.8
1932	Janusz Kusocinski	POL	30:11.42	Volmari Iso-Hollo	FIN	30:12.6	Lauri Virtanen	FIN	30:35.0
1936	Ilmari Salminen	FIN	30:15.4	Arvo Askola	FIN	30:15.6	Volmari Iso-Hollo	FIN	30:20.2

3000 Metres Steeplechase

1924	Ville Ritola	FIN	9:33.6	Elias Katz	FIN	9:44.0	Paul Bontemps	FRA	9:45.2
1928	Toivo Loukola	FIN	9:21.70	Paavo Nurmi	FIN	9:31.2	Ove Andersen	FIN	9:35.6
1932*	Volmari Iso-Hollo	FIN	10:33.4	Thomas Evenson	GBR	10:46.0	Joseph McCluskey	USA	10.46.2
1936	Volmari Iso-Hollo	FIN	9:03.8	Kaarlo Tuominen	FIN	9:06.8	Alfred Dompert	GER	9:07.2

Marathon

1912*	Kenneth MacArthur	SAF	2:36:55	Christian Gitsham	SAF	2:37:52	Gaston Strobino	USA	2:38:43
1920*	Hannes Kolehmainen	FIN	2:32:36	Jüri Lossman	EST	2:32:49	Valerio Arri	ITA	2:36:33
1924	Albin Stenroos	FIN	2:41:23	Romeo Bertini	ITA	2:47:20	Clarence DeMar	USA	2:48:14
1928	Mohamed El Ouafi	FRA	2:32:57	Miguel Plaza	CHI	2:33:23	Martti Marttelin	FIN	2:35:02
1932	Juan Carlos Zabala	ARG	2:31:36	Sam Ferris	GBR	2:31:55	Armas Toivonen	FIN	2:32:12

表 3